

# 救済の技法

倉木学人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もし、ゲームの世界が現実だったら？ 馬鹿らしいと思うだろう。ゲームと現実を一緒に考えるなんて。

だから、だからこそ、私と妄想してみないか？

ねえ、お願いだから。

\*\*\*

本編全10話＋番外編4話。拙作、“絶望の国の希望の艦娘たち”と設定を共有しています。

\*\*\*

二等市民様から、挿絵をいただきました。

# 目次

## 救済の技法

1. TOWN | O P H A S E | 5

1

2. MOON | T I M E | 13

3. 庭師 | K I N G | 27

4. G H O S T | B R I D G E

42

5. ナーシ | サス次元から来た人

57

6. 万象の | 奇夜 | 70

7. M O T H E R | 85

8. 橋 | 大工 | 99

9. 救済の | 技法 | 113

10. W O R L D | C E L L | 128

救済の | 技法「B o n u s | T r a c k s」

11. B E R S E R K | F o r c e | 145

s | 145

12. B E R S E R K | F o r c e

s | (G O D | H A N D | M I X)

161

13. B E R S E R K | F o r c e

s | (オリジナル・ | カラオケ) | 178

14. B E R S E R K | F o r c e

s | (T V | v e r s i o n) | 192

## 救済の技法

## 1. TOWN—0 PHASE—5

カウンセリングというものがある。対話をして、その中で得た本人の心の成長を基に、心の問題を解決してもらおうのである。

つまり、悩みを自分で解決できるようになつてもらおう、というわけである。

ここ、呉の鎮守府では、艦娘相手に試験的なカウンセリングが行われている。世間では、謎の存在である「艦娘」と呼ばれる少女たちが、これまた謎の存在である「深海棲艦」を相手に戦っている。艦娘は謎の存在であるが、どうも悩める人の心はあるらしい。

そこで、カウンセリングである。戦いの中で悩める未熟な少女たちの負担を、どうか和らげようというわけだ。

とはいえ、なかなか上手くないもののである。そもそも人の心はあいまいにして謎である。艦娘自体はさらに謎の塊である。

「いない艦娘の名を呼ぶ病」なんてものがあるぐらいだ。本当に艦娘の心が抱える問題を、人の手で解決できるのだろうか？

まあ、やらねばならないのだが。カウンセラーとしても、このご時世でやつと得た仕事でもある。

できることが、例え彼女たちに寄り添うことだけだとしても。それはきつと意味があるはずだ。

二月の夕暮れ。エアコンの部屋から出にくい日。ドアからノックの音が聞こえる。

今日もまた、カウンセリングが始まる。

今日は新しい艦娘のカウンセリングだと聞いているが、さて。

「入っても大丈夫ですよ」

「失礼、するわ」

ためらいつつ入ってきたのは、駆逐艦叢雲の艦娘。銀髪に赤い眼。見た目麗しく、見て一発でわかる、まぎれもない艦娘である。

「はじめまして。心理カウンセラーの倉橋佳樹といいます」

「はじめまして。私は、駆逐艦娘の叢雲よ」

「どうぞおかけになつてください、叢雲さん」

そうして、彼女は椅子に座った。

「それで、御用ですか」

彼女は頷き、しばし沈黙する。

「え、と。ここつて、誰にも聞かれてない、よね？」

「はい。誰にも聞かれてません。勿論、ここで話したことは一切、貴女の許可なく誰にも話しませんよ」

「そう」

カウンセリングに速度はいらない。とはいえ、歩み寄つてくれるのはありがたい。

「私が来たのは。その」

「お悩みですね」

「違う」

短く否定する。そして、再び沈黙する。

「私は」

口を開け閉めし、目は泳いでいる。言いたくないことなのだろう。

ただ、ここに来ることが提督の命令でもあると、カウンセラーは聞いている。

だが、それでもまあ、言いたくないなら言わなくてもいいのだが。

そうした中、口を開いたままにして、彼女は言葉を口にしました。

「死にたがつてるのが、バレたのよ」

カウンセラーは、発言を紙へと書き始めた。書いたことは、後に読み返すことにより理解の手助けになる。

「死にたがっている、ですか。ここに來ることになつた経緯や、あるいはそう思つた理由を聞かせてもらつてもよろしいですか」

言いたくないのは、おそらく本当に死にたかつたのかもしれない。止めてほしいなら、*「死にたい」*と口にするだろう。

隠していたことがバレた経緯。あるいは、死を望むというのはどうしてか。

どちらかに答えてくれるだろうか。

「元々、私は死にたがりの性格をしていて。それは今まで隠していたのだけど。それが仕事中、提督にバレたのよ」

「そうですか」

「死にたがっているのが、余程提督のお気に召さなかつたみたい」

死にたがっている人がいれば、普通はそれを止めるように働きかけるだろう。提督はそういう思いで彼女をここに連れてきたのだろう。

「死にたいと思つた理由は、自己肯定ができなくて。自分自身が好きになれないから」  
「なるほど。自己肯定ができない、ですか。それは納得です」

自分自身が好きになれない、か。これもまあ、納得できる。自覚しているのは驚きだ。恐らくだが、彼女は自分を否定し続けてきたのだろう。そうしていく内にどこかで、

自分の存在意義を見失つてしまつたのだろうか。



それは、まあ、死にたくなるものだ。

とはいえ、カウンセリングに来る人は大体がそうである。彼らは自身の在り方へ疑問を持っているのだ。

これが、私なのか、と。

と、そんな中、ふと彼女は顔を上げ、赤い眼差しをこつちへと向けた。

「ねえ。止めにしない？ こんな話をして、誰も幸せになれないわ」

「はあ。いいですけど」

「そもそも、こんなところに居たくない。私はもう手遅れなんだけどさ」

カウンセリング室をこんなところ呼ばわり、か。カウンセリング自体に良い印象を持つていないのかもしれない。

「何もなかった。快方に向かっているって書いて、それでいいでしょう。それなら皆幸せだって」

カウンセリングを受けることは悪いことではない、はずなのだが。カウンセリングは恥ずかしいのだろうか。

どうも、彼女は強がっているように見える。

「でも、これからどうするんです？ 私としても死にたがっている人を放置するのは、ちよつと」

「そう、か」

放置も時には選択肢の一つであろう。但し、それで状態が良くなるならば、である。カウンセラーとしては、ここで死にたがりを見捨てることはできない、と思う。例え、実際に死にたくなくても、である。

カウンセリングは大抵、長く苦しいが、その分やりがいはある。艦娘と話をしたい、と言う気持ちもなくなはないが。

それに、目の前の艦娘は援助を拒んでいるが、話は通じそうだ。このまま話を続けたいと思う。

「先生は、他人の人生に興味があるのかな」

「そうですね。私自身も、人と話すのが好きなので」

これは事実だ。一対一の深い付き合いができるのも、カウンセリングの魅力なのだ。

「聞かせてもらえますか」

叢雲は顔をあげて、じつとこっちの眼を見ってくる。

「じゃあ。私について教えてあげる。興味本位で聞いてほしくない話なんだけど。どこから話したものかしら」

彼女は頭に手をあて、かろく頭をかき混ぜる。

「そうね。私は、所謂、普通の艦娘とは違う。私は、叢雲になることを望んだ。だから私

は艦娘なんだ」

艦娘になることを望んだ、という所にカウンセラーの手が止まった。

「叢雲であることを望んだ、ですか。望んだ、というのはどういう」

艦娘は選ばれた少女がなるものと聞いている。決して選ぶものではないはずだが。

「私、叢雲は、夢のような話から始まったんだ」

叢雲はそうやって語り始めた。

「深海棲艦や艦娘なんて存在が現れる前の話。一人の男が交通事故に会ったんだ。男も運転手も不注意で、お互いに損をした。男は意識不明の重体、運転手は、まあ、警察のお世話になった」

確かに交通事故は、よくある話だ。ごく、ありふれた、どこにでもある話だろう。

なぜそんな話を始めるのかはカウンセラーには理解できないでいる。

「そんな朦朧とした意識の中で、男は一人の少女と出会った」

「少女？　ですか」

「そう」

この世ではない意識の中、男は少女を見出した。カウンセラーにとって、どこかで聞いた話だ。

ああ、メスナーという登山家が、似たような話をしていたとカウンセラーは思い出し

た。

「潜在意識、ですかね」

「さあ、ね」

メスナーは山を無酸素登山中に遭難し、極限状態に陥った。そんなとき、彼の傍らに少女が現れたそう。彼はその少女のアドバイスを傾けることで、無事、下山することができた。

この話を馬鹿馬鹿しいと片付けるのはたやすい。だが、神秘的なものは、案外馬鹿にならないのだとカウンセラーは教科書で読んだことがある。

そもそも艦娘という存在が神秘的なものである以上、無視するわけにはいかないだろう。

交通事故に遭った彼も、そういった経験をしたのだろうか。

そして、それは艦娘とつながることなのだろうか。

「彼女の正体については、私も気になる所だったけど。ともかく、出会うと二人はゆっくりコーヒーブレイクを楽しんでいたんだ。楽しかったな。出されたコーヒーもチーズケーキも美味しかった」

叢雲の顔に、柔らかさが表れている。しかし、すぐに元の顔に戻った。

「でも、楽しい時間はあつという間だった。突然、少女が言ったんだ。『そろそろ夢から

目覚める時間だ。君は現実へと戻るのだ”」

彼女の視線が下がる。

「すると男は。情けないことに駄々をこねだしたんだ。 〃現実なんて、もう見たくない。

どうしてこのまま死なせてくれないのか” ってね」

男はどうしようもない現実に疲れていたのだろうか。死にたい理由には十分だろうが。

「ま。そう言われても少女は困るわけで。 〃そうは言われても、生きようとしているのは、君の意思故だろう。本当に死にたいのならとつくの昔に、君は君の手で死んでいる”」

それは正論だろう。死にたい、という人に “じゃあ、なぜ死なないのか” と言うようなものだ。

正しいが、酷でもある。

死にたい、というのは死ぬほど苦しいというメッセージなのだ。

じゃあ死ぬよ、と返すのは無慈悲な拒否となるだろう。

「男はそれを聞くと静かに泣き出した」

やはり酷であつたようだ。男は痛いところをつかれたのだろう。

「そして、言ったんだ。 “この世に戻りたくない。信じるものが何一つない世の中で、生

きるのもう嫌だ”」

「それは。辛い言葉ですね」

信じる物がない、というのは重大だ。少なくとも男は自分と言うものを信じていないのだろう。

それこそ、目の前の彼女のように。

「少女はそこでこう提案したんだ。 ”じゃあ現実に信じるものがあれば、君は生きようと思うのかな” って」

カウンセラーには、ようやく目の前の彼女が言いたいことがつかめてきた。

「信じがたいことに、その少女は私の理解を超える何かを持っていた。つまりのところ、彼女は言わば、ランプの魔人だったんだ。彼女は言った。 ”君の妄想を現実にしよう。現実を君の意思で塗りつぶそうじゃないか”」

もし、願いが叶うのならば、あなたは何を望むのだろうか。

「私は妄想を口にした。そうして目を覚ますと、私は叢雲だった」

そうして沈黙が訪れた。叢雲は目の前のカウンセラーの眼を見て、様子をうかがっている。

「なるほど」

さて、どう表現したものかとカウンセラーは考える。目の前の彼女をどう見るべき

か。

この世は、少女が妖精さんに浚われ、艦娘に作り変えられる世の中だ。彼女の言うところの、「ランプの魔人」は俄に信じがたいのだが。

しかし、そういった成り立ちがあってもおかしくはない、かもしれない。少なくともそれは、彼女の中に明確に存在していると考えるべきだ。

「この世界の、艦娘と、深海棲艦、妖精さん、そして叢雲さんは。つまり」  
「私が、望んだ結果なんだ」

ははは、と力なく彼女は笑った。

「やっぱり変かな。私」

「どうしてそう思うのでしょうか。何が変なのでしょうか」

彼女が何を気にしているのかが、カウンセラーには理解できないでいる。ランプの魔人に遭った、と言った所だろうか？

「だって、こんな世界を望むなんて、可笑しいでしょう？ 世間では、国毎の艦娘の保有数で格差の問題が生じ、深海棲艦のせいで飢餓と砲撃に苦しむ国が増え、今日もまた、妖精さんに誰かが浚われている。こんな世界のどこが良いのか、分からないでしょう？」

彼女は俯きながら話し続ける。

「誰も、こんな世界を望んではいないはずなんだ。こんな、どうしようもない世界は。」

もつと楽しい世界を、見てて笑顔になれるような世界を、皆は望むとは分かっていたさ」  
彼女は再び顔に手をあて、髪を掴む。

「でも。これが、自分の望んだ通りの世界なんだ。自分の、本気の冗談だったんだ。分かってくれとは言わないけどさ」

そうして、再び彼女は沈黙する。

これが、カウンセラーと、*“*始まりの艦娘*”*との長い戦いの始まりであった。



## 2. MOON TIME

カウンセラーは考える。勿論、世界を妄想で塗りつぶした、と自称する少女についてだ。

彼女をどう扱うべきか、非常に悩ましい。

世界を変えるだけの力を得た人間、というところはまあ、置いておこう。

ともかく、艦娘と向き合っている、ということは適度に意識するべきであろう。艦種によって大小はあるが、人を容易く殺すだけの力を持った少女たちだ。力がこちらにあるいは周囲に向かないよう、人格へ最大限の配慮をするべきだろう。それはカウンセラーにとって、これまでと変わらないことである。

問題なのは彼女といかに向き合っていくか、という所だ。彼女は自ら艦娘となることを望んでいる艦娘だ。

艦娘になったことに苦しんでいる艦娘とも、艦娘になったことを理解できていない艦娘とも違うはずだ。恐らく、艦娘になることに、特別な理解がある。

こう考えてはなんだが、何故、彼女は艦娘に？艦娘には、なりたい、と思うほどのものがあつたのだろうか？

艦娘になりたい。つまり、彼女は艦娘、深海棲艦、そして妖精さんが現れる前から、彼らを知っていた、と考えるべきであろう。

彼女は、私たちの誰よりも、彼女について明確に何かを知っている、はずだ。それについて聞いてみるのもいいかもしれない。

そうして悩み、考える内に今日もまた、カウンセリングが始まる。

二回目のカウンセリングであるが、叢雲の態度は1回目と違って自然体だ。そこにいるのが当たり前、といった感じだろうか。

当たり障りのない掛け合いの後、うんざりした態度で叢雲が口にした。

「さて、何が聴きたいのかしら」

カウンセラーの目の前には、前回と同じように、叢雲が座っている。

カウンセリングに来たくない、と言つてはいたが、しつかり来てくれたことに彼は嬉しく思う。

「前回の確認ですが。叢雲さんは、叢雲さんの基となった男性は、自分が嫌いだったのですか」

「そう。そして、今もそう思っている」

これはカウンセラーの推定通り。

「叢雲さんにとって、叢雲さんは、なりたかったものなのではないですか」  
「それは。どうなのだろう」

叢雲は沈黙する。そして、ぼつぼつとつぶやく。

「彼女自体に魅力はあったのだろうけど。いや、うん」

「貴女ではない、叢雲さんがいる、という風に聞こえますが」

叢雲は、あー、という反応を返す。

「そうね。少なくとも、『艦隊これくしょん』という作品には、私にとって価値があったのだと思う」

「艦隊これくしょん、ですか」

「ゲームの名前よ。この世には、もう、無いけど」

叢雲の視線が下がる。

「ゲームが元だったのですね。どんな作品だったのですか」

「提督と呼ばれる人物が、艦艇を擬人化した少女を率いて、深海棲艦と戦う。そんなゲームだった。そう、今は現実のことよね」

カウンセラーとしては、この世界の艦娘たちがゲームだった、というのはまあ、理解できなくはなかった。何しろ、艦娘は美少女揃いである。

そんなのが大量発生しているのだ。始め見たときは日本始まったかと思ったわ。

「ありそうなゲームですよね」

「ただ、人気はたいそうあったんだ。アニメになつて、携帯機やアーケードに移植されて、公式小説もたくさん作られて、ファン活動も盛んだった」

いや、案外大したことないのかもしれない。艦艇の擬人化自体は昭和の頃からやつてたらしい。

あと昔話に、助けた鶴が美女になつて家に訪ねてくるとか、うん。

擬人化は、言うほど奇妙な事ではないのかもしれない。実際に人が艦娘になるのは大問題だが。

「その中で叢雲は、プレイヤーが最初に選ぶことのできる艦娘の一人だった。まあ、気になる艦娘ではあったわね」

改めてカウンセラーは、叢雲を見つめる。彼女は、吹雪型駆逐艦五番艦「叢雲」の艦娘、つまりは擬人化娘だ。

こうしてみても、これがあの叢雲か、という印象を抱くには至らない。

初めてのカウンセリングの後、カウンセラーは彼女という艦、及びに彼女と関連する艦について調べた。艦娘と向き合うには、彼女たちの来歴を見るのが良いアプローチとなる。

と、カウンセラーは思っているのだが。

そこから見えてくる彼女の姿は。由緒ある名前と、まあそれなりの実績、ささいな卜ラブルに見舞われた艦。

正直に言う、前回のカウンセリングとこの情報で彼女を判断しろ、と言われても困るのだ。

ひよつとしたら、ゲームでの彼女に何かがあるのかもしれない。

あるとしたら、そこだろう。

艦隊これくしょんなるゲームを彼は知らない、そこを疑問に思うのである。

「正直を言うなら、もっと、鳳翔さんとか、古鷹さ。いや、古鷹とか。好きな艦娘はいたのだけ。でも。その艦娘に対して、なろう、という気持ちはなかったわね」

叢雲は顔を上げる。

「ほら、いくら好きなロククミュージシャンの恰好を真似して同じ台詞を吐こうと、その人になることはできないだろう」

「なるほど」

好きな人に近づこうとか、そういう意味ではない、ということにはカウンセラーに理解できる。

未だ、彼女が艦娘に成りたがっていた理由はよくわからない。

だが、この場は彼女に自由に話をさせるのが良いのだ。

「そもそも、私は、他の誰かになろう、という気持ちになかった。私は私以外の何物にもなれないのだとは知っている」

「でも、それは。違うのでは。叢雲さんは、自分を捨てようとしたのではないのですか」  
彼女は叢雲であることを望んだのではないか。カウンセラーはそう思わずにはいられない。

「私は」

彼女は口ごもる。

「私は、私以外の誰にもなれないって」

再び彼女の視線が下がる。

「でも。私が私であるのは、たまに自信が持てなくなる。私が、こうやって失敗するとね」

彼女は頭に手を当て、髪をかき混ぜる。

「今見ていること全てが他人事のように思えて仕方ないんだ。艦娘も深海棲艦も、全部自分の頭の中の出来事で。現実の自分は、未だに病院のベッドの上なんじゃないかって」

カウンセラーは、それはそうではない、と言ってやりたかった。自分を信じて欲しかった。

だが、それを口にするのはよくないことだと自制する。

「あるいは、精神病院の片隅で、謔言を繰り返しているのかも。ああ、これは、考えたく  
なかつたな」

カウンセラーはゆっくり頷く。

「大丈夫ですよ」

彼女を否定するのではなく、受け止めてやるのが最適だと判断したのだ。否定して  
も、彼女はそれに肯定するだろうか。

例えば、現実を見ることができない人間に、現実を見ろといっても、直視するだろ  
うか。

できないだろう。だから、受け止めるのだ。

いつの日か、現実を肯定できるまで。

「そこまで、私も狂ってないと信じたいね」

しばらく沈黙が流れる。

そして、彼女が再び口を開いた。

「何故、私が、叢雲であることを選んだのか。自分に近い艦娘は他にもいたはずなのに。  
何故、私が叢雲であることを望んだのか」

叢雲は自らのほつぺたを触り、軽くつねる。

「多分。叢雲には私が愛したかったけど、愛せなかったものがあつたからなんだろう」  
「愛したかったもの、ですか。それは、艦娘としての叢雲さんですか」

「多分、そうですね」

艦娘としての、つまりキャラクターとしての叢雲のことであろう。

「私が、叢雲になりきれれていない、と思っっているのは、何だろうか」

叢雲は、頭を軽く搔く。

「私は、叢雲というキャラに囚われすぎているのかもしれない。誰が定めた叢雲という人物がいるわけではなく。私が叢雲として行動し、叢雲の台詞をしゃべるときに、私に叢雲という名がつくのだろう」

「納得はできませんね。そもそも、本当の自分、というものはありませんからね。周囲の環境や人間関係があつてこそ、自分というものが作られるのですから」

カウンセラーの目の前の彼女は、叢雲という少女を演じようとしている。ゲームのキャラクターを現実で演じようとしている。

口ぶりからして恐らく、本人も馬鹿らしいと思っっているのかもしれない。

「そうね。私は、自分というものに固執しすぎているのだろうか」

「大事な気づきだと思いますよ」

自分を捨てる、というのは美しいことなのかもしれない。醜い自分を捨て、新しい自



分へと生まれ変わる。自分の欲望を抑え、夢を叶える。なんと素晴らしいことか。

しかし、自分は自分を守ろうとする。自分を捨てようとする、かえって捨てれなくなる。捨てよう捨てようと思っても、自分可愛さに捨てれない。

そうしないと、自分を保てないからだ。

「分かつているわよ」

叢雲は時計をチラリと見る。

「もう少し、自分語りをしなければならぬかな」

「できれば。お願いしたいです」

叢雲は軽くため息をついた。

「私はカウンセラーという人種を詳しく知らないけど、貴方たちに必要なことなのでしようね。いいわ」

カウンセラーとしては、彼女に対し、少しやりにくさを感じている。目の前の彼女は聞けば応えるし、歩み寄り、話もしてくれる。

少々、話のリズムは独特だが、疑問に答えようとする姿勢は真面目に感じられる。

だが、この場には何か欠けている。それは、まだ分からない。

「叢雲になれないか。そうだな。私が叢雲に、いえ、なぜ艦娘に成りたがったという話を、もつと突っ込んですべきかしら」

再び、叢雲は顔を上げる。

「叢雲に成り損なつた私も、以前の自分も、思う所はあまり変わつてはいない。自分と言う存在を嫌っていること、そして、普通になりたい、と思つている」

カウンセラーはメモをする手が止まる。

「自分を嫌つているというのは分かるのですが。普通になりたい？ ですか」

「理解できない、かしら。普通でない存在が、普通に憧れる話というのは」

彼女の問いに少し考え、応える。

「普通がうらやましい、と。なるほど」

「理解できるのかしら」

「深海棲艦が現れる前の社会も今の社会も、普通でない人が生きるには辛い社会だと思います」

いつの時代も、少数派というのは、多数派に迫害されるものである。

あいつは自分たちとは違うから。あいつは普通ではないから。

そういった理由で区別、あるいは差別されるものである。

それはこの社会でも変わらない。そもそもこの日本は、民主主義の国家であるのだから。

「個性というものを大事だと主張しながら、没個性であることを良しとする風潮が、日本

社会にあると思いますよ」

叢雲は、ふん、と鼻を鳴らす。

「いいと思ってるけどね。この社会の在り様も」

「そうなんですか？」

「何でも社会が悪い、社会が悪いで済ませたくないからね。この社会はあつて当然だと思ふ。彼らが悪いとは思わないわ」

カウンセラーは意外に思う。少数派が多数派を羨ましいと思うのは当然だろう。

少なくとも、彼女は羨ましいと思つてゐるはずだ。

そして、多数派を嫌い、憎んでも、それは仕方のないことだと思つていたので。

「ただ、いくら私が普通になろうと努力したつて、例え、神様に、いや。この場合はランプの魔人かしら。それに願おうとしても叶う事はないのだと知つてゐる」

いや、意外でもないのかもしれない。彼女は、多数派に対して、諦めの感情を持つてゐるのかもしれない。

「私が想像する普通と、皆が思つてゐる普通には大きな隔たりがあるのだから。そもそも、私は皆とズレてゐるのだから」

「ズレ、とは」

叢雲が、暗い声色で小さく、はははと笑つた。

「皆、私のことを見て笑うんだ。私が失敗をする度に、私が変なことをしでかす度に私のことを噂する。私には何故皆が笑うのか分からない。そのくせ、私が笑っても皆は笑わない」

叢雲は下を向き、ため息をついた。

「何故だかは、今は分かっているのだけど」

叢雲が上を向いて、カウンセラーの顔を見る。

「ともかく、私が想像している普通は、大量生産の工業品なのさ。完成された人間、型に押し込められた作り物。そういう者に私は成りたかった」

「それは、歪ではありませんか」

とてもじゃないが、それを人間というには無理があるだろう。

人間は生物だ。皆違うし、どちらかというところ芸術作品に近いだろう。

間違つても工業製品ではない。

「もちろん。そんな人間が実在する訳がない。そんな人間は、所詮作り物なのよね。それこそ艦娘みたいに」

カウンセラーは理解に苦しんでいる。彼女の言うとおりであれば艦娘が作り物という表現は正しいのだ。

彼女たちは、実在の艦艇を基に、作られたキャラクターである。

だが、彼の中の艦娘の印象と一致しない。彼が見てきた艦娘は、目の前の彼女も含めて、歪ではあるが人間らしさに溢れている。

それがどうも、奇怪に思えるのだ。

「当然、人間である私たちが、工業製品である訳がない。人間は、不完全な生き物だから。そういつた意味で、人が艦になる、というのは間違っている訳で。私のように、艦娘になれないと嘆いている艦娘は、間違っている訳だけだ」

艦娘とは、一体何者なのだろうか。何故、彼女たちは艦娘になりたがるのだろうか。

「私は。なんだろう。ともかく、叶わない夢を見ているんだろう」

自分を捨てて、艦になる。それにどんな意味があるのだろうか。それは素晴らしいことなのだろうか。

「ああ、言っておくけど、私を知る叢雲はこんなことを考える艦娘ではなかった。あれは、特徴的ではあったけど、普通だった。だからこそ、私は叢雲に、艦娘になりたがったのだと思う」

でも、こうとも思える。存在しない、絵にかいたような美少女になることが。きつと彼女にとつては、何か価値のあることだったのだろう。

それだけは、認めるべきことなのだろう。

「少なくとも、私は提督であることは望んでないのよね。例え望むにしても、画面の前の

自分ではなく、画面の奥の存在であることを望んだんだ」  
再び、彼女はため息をついた。

### 3. 庭師KING

カウンセラーは、手元の本を見つめる。それは一種の自己啓発本だった。

自己啓発本といつても巷でよく売れているようなビジネス本とはまた違った、スピリチュアリティ（「靈性・精神性」などを表す抽象的な概念）の高い本である。ビジネス本は科学をうたい文句にするが、この系統の本は既存の宗教を主軸としている。

内容の主題は極めてシンプル。従来の古い人間から脱却し、新しい人間へと進化しよう、という本である。この本によれば、現代の人間が抱える様々な問題、つまりの所、いじめであったり貧困の停滞化であったりは、古い人間の無意識によつて引き起こされている、とされている。よつて、様々な問題を解決するために、新しい人間への意識へと目覚める必要がある、という訳である。

そして、目覚めるべきは、あなたである、と。

まあ、カウンセラーがよく目にするタイプの本である。深海棲艦によりグローバル社会が崩壊し、以前ほど情報に満ち溢れていないこの日本社会ではあるが、出版業界は衰えを見せない。

艦娘以前に人間が悩んでいるこの社会、未だに線路に飛び降りる人の絶えないこの社

会、こういった本が売られるのも道理であろう。

カウンセラーがこの本を手にしたのは、艦娘らに関する興味深い批判の記述があったからだ。

曰く、艦娘は古い人間の奴隷にして奉仕者である、とのこと。

曰く、妖精さんや深海棲艦は我々の欲求が生み出した“キリスト的な悪魔”である、とのこと。

叢雲の言葉を鑑みるに、興味深い考察であると思う。恐らくだが、この著者は艦娘たちが何で出来ているかを見抜いている。科学的とは言い難い文章であるが、何を言わんかは伝わってくる。

艦隊これくしょんはゲームである。妖精さんの手を借り、艦娘を集め、深海棲艦を打倒する。

そういったゲームだったのだろう。著者はゲームへの知識は無いようであったが、直観的にこれらを見抜いているようだ。

ふと、カウンセラーにある考えがよぎる。自分自身が観てきたこと、これらを本にするのはどうだろうか、と。

今、ここは日本艦娘のカウンセリングの最前線である。学問的な徒の中で、恐らく自身が一番艦娘に触れ、その心を知っている。



それらの成果を本、あるいは論文にできないか、と。

カウンセラーもかつては心理学を学ぶために大学院に通った身だ。学問に貢献したい、という考えがなくもない。

今も大学の方では艦娘の心理の研究が行われているが、自分がその中の輪に入ることのできるだろうか。

そこで、カウンセラーは考えを打ち切る。こういった妄想は楽しいし夢も膨らむが、現実に戻ってくるべきだろう。夢を見て、現実をおろそかにすれば、いつのまにか現実はずたぼろになるだろうから。

どうも前任のカウンセラーは、無謀な欲張りにより艦娘との関係が上手くいかず、辞任に追い込まれたらしい。自分は、そうあるべきではないだろう。

夢が叶うのは、いつだって目の前のことを片付けた後である。

しかし、自分は艦娘のカウンセラーとしてどうあるべきか。答えはまだ、見つからない。

そして、それは恐らく見つかることはないだろう。

そうした中、今日もカウンセリングが始まる。

のだが、今日は叢雲がやって来ない。まあ、こんなことは珍しくない。艦娘は基本的に軍人で、忙しいのだ。カウンセリングの予約を入れても、そこそこの頻度でドタ

キャンされる。

これは彼女らが不誠実という訳ではない。

基本的に彼女ら艦娘は、カウンセリングを軽視する傾向にあるのだ。カウンセリングより、仕事の方が大事、という理由が大半である。

だから、そのうち連絡か何かが来るのだろう。あるいは、何も来ないかもしれないが、彼女がここに来ることは彼女の仕事の一環であるので、何もないとはいえにくい。

本でも読んで、時間を潰すことにする。

すると、約束の時間の十五分後、叢雲はやって来た。

いつもの恰好とは違い、頭に赤く光るウサ耳ユニットを載せ、紺色のジャージを着ている。

息が荒いことから、急いで来たのだろう。

「御免なさい。少し、遅れたわ」

「大丈夫ですよ」

カウンセラーにとっては、来てくれるだけで嬉しいのだ。

「今日は何か、ありましたか？」

「ちよつと、作戦の後で。中破したから、後処理に手間取ったのよ」

カウンセラーは納得する。これもよくあることだからだ。

「たいしたことは無いから、あまり気にしないでくれる?」

「分かりました」

当たり障りのない話、つまり仕事の話でもしようと思ったが、これでは厳しそうだ。

「とはいえ、話を遮ってしまったわね。代わりに何か話そうかしら」

開始早々、沈黙が場を支配する。

「あの。いいですか?」

「何よ」

「叢雲さんは、何か、したいこととか無いのですか?」

叢雲は露骨に顔をしかめる。

「その話題は不愉快ね。かつての父親を思い出すわ」

「それは、申し訳ありません」

カウンセラーは頭を下げて謝罪する。これは言い方が不味かった。

「ふん。いいわ。私がしたいことは。そうね、恥ずかしいけど、無いわね」

答えてくれるのはありがたいが、彼女が恥ずかしがる理由はわからない。

「したいことがない、というのは、それはそれで彼女の望んだ普通のことではないのだからか。」

その辺りは、彼女は理解しているのだろうか。

「強いて言えば、私は仕事がしたいわね」

「仕事ですか」

叢雲は頷く。

「私の願いは。まあ、一応、叶っているからね。軍隊で戦うことも、私の夢の一つだったのよ」

カウンセラーは少し考える。

「それは意外ですね」

なるほど、彼女は他の艦娘より人間味が強いが、彼女も艦娘だということだろう。

「こう言つては何なのですが。叢雲さんは、内向的な人間のようなのですから。芸術や、哲学といった方面の仕事を望まれるものと思つていました。そういったことも夢の一つではありませんでした？」

すると叢雲はカウンセラーを見上げ、じつと見つめる。

「そうね。それもかつての夢の一つだったわ」

あくまでそれが全て、という訳ではないが、彼女は内向的な傾向が見える。

神経質さ、数々の自問自答、そして、クリエイティブな活動。

しかし、あくまでそれが全てで、外交的ではない、という訳ではない。彼女には、外

向的な傾向も見られるのだから。

オープンさ、おしゃべりであること、そして周囲の人間への極端な関心。

一見、矛盾しているようにも見えるのだが。しかし、存在している。

どちらが本当で偽物か。あるいは、これらを両方持ち合わせている、と見るべきか。

カウンセラーとしては、内向的な彼女が正直な彼女により近い、と考えている。

「正直、自分は軍人に向いてない性格だったから。この性格と、無能な働き者だなんて、軍人に向いているとは思っていなかった」

叢雲は下を向く。

「戦は怖くて、辛いことだし。海はとても過酷な場所だけど。でも、全ては私が望んだことだから」

再び顔を上げ、カウンセラーを見つめる。

「私は、戦ってから、それからそこで死にたいのよ」

カウンセラーはゆっくり頷く。

「人間として、戦いを望まれるのですね」

そして、再び叢雲は顔を下げる。

「おかしいかしら？」

「私にはとても人間らしいと思うのですが」

どこもカウンセラーにはおかしいとは思えないのだが。

「確かに、戦争は悪で、平和は望ましいことでしょう」

カウンセラーは日本に生まれていながら平和というものの価値が信じられないでいる。

戦争というのは所詮、経済行為であつたり、あるいは人間の進化の歴史であるのかも  
しれない。

世間で主張される平和が、人類共通の絶対的な価値を持っているのだとは信じるこ  
とができない。

そして、恐らく、皆は言わないだけで、気づいているのかもしれない。

「ですが、心の平安のために戦うことは、その人にとって戦争をするだけの価値があるの  
だと思います」

戦争を肯定するわけではない。

戦争を否定するのではなく、ただ、存在を認めるだけである。

果たしてこれが人として正しいのかは悩ましい。

ただ、カウンセラーは艦娘のカウンセラーとして、こういう立場に立つべきである、と  
思っているのだ。

「なんなのよ。平和のために喜んで戦争をするとか、それぐらい性質の悪い冗談なのに」

この気持ち彼女に伝わればいいのだが。

私は貴女のことを理解しようとしているのだと。

「確かに、他の皆のように、仲間やお国のため。ではないわね。私は自分のために戦っているわ」

叢雲は沈黙する。恐らく、自分の中で何かを考えている。

「私が戦う理由か。私だけの戦争。私だけの、艦隊これくしょん」

叢雲はユニットに邪魔されながら、手で頭をかき混ぜた。

「うん。艦これの世界観は好きだったけど。ゲーム自体はあまり好きではなかったわね」

「はあ」

「そもそも私、あまりネットゲームとかって好きじゃないのよね。何だろう。今一つ、最終的な目的のない中での、艦娘を集めるって作業というか」

ネットゲームが好きじゃない、というのはカウンセラーにも共感できる。一時期、友人に勧められていくつかやってみたものの、どれも長続きはしなかった。

友人が言うには、ネットゲームはコミュニケーションツールである、らしい。皆で戦う、皆で語り合う、皆で共有する、そういうことが本当の目的である、と。

彼らにとってのネットゲームが、自分にとってのロックや映画である、とそういう風

にカウンセラーは納得している。

「でも、やつぱり、私には価値があったのだと思う。携帯機のやつは結構やってたし」  
叢雲は頭に手を載せ、考える素振りを見せる。

「艦この魅力は、いや、間違いない、所有することにあつたのだと思う」  
躊躇いながら、彼女は話し続ける。

「先生は二次創作、あるいはファン活動についてはご存じ？」

少し、カウンセラーは頭をかき上げる。友人の一人に思い切り、理解する。

「ええ。既存の作品を基に、ファンが作品を作り、ネットや同人誌即売会などで共有するのですよね」

「そう。艦これは。うん。体の良いジョークグッズだったわね。東方と同じく、一部で嫌われるぐらいには規模も大きかったのだし。ああ、そういや東方もそうか」

彼を見て、東方というジャンルも知っている。それで、言わんことが理解できた気がする。

「艦これには、作者たちが自分のものとしたい、というだけの魅力があつたのだろう。艦これの場合は、ありのままの現実を切り出したように見える、各々のイメージとしての艦、戦闘美少女が、多様に用意されていた」

創作物については理解に苦しいが、彼らの創作したいという熱については素直に感心



していた。

それは、何の意味もなかったり、特殊な性癖であったり、成人向けであったりするのだが。陰鬱でなく彼らは実に楽しそうで、生き生きしていた。

「作品を自分のものとして分解し、再構成することがどんなに素晴らしいのかは、言うまでもないわよね」

叢雲は、はははと軽く笑う。

「だって、この私がやってることなのだから」

カウンセラーは沈黙する。彼女にどういっていいのかわからない。

「話を続けるわよ。先生は、神様転生というジャンルの創作物はご存じかしら」

「えーと、いえ」

これは、カウンセラーには思い当たらない。転生、は思い浮かべても、神様と上手く結びつかない。

「死んだ人間が、神様と呼ばれる存在と出会い、二度目の人生を謳歌する。まあ、デウス・エクス・マキナを最初に持ってきたって話よ。シンデレラストーリーとも呼べるかしらね」

「はあ」

神が出てきてどうにかなった。

救われない物語を無理やり救う手法、としての印象を受ける作品である。転生により、救われない人が救われる、ということだろうか。

「叢雲さんは、これがそうであると？」

叢雲は沈黙し、じっとカウンセラーを見つめる。

「叢雲さん？」

「ねえ。先生もこう思うかしら」

叢雲は俯く。

「神様を求めている人に必要なのは、神様なんかじゃないって。彼らに本当に必要なのは、神様じゃなくて、良識のある大人だって」

「それは」

カウンセラーが固まる。

カウンセラーはその職業上、*“良き大人”*であることが求められている。カウンセラーも社会人の一人であり、そして人を支援するという役割上、多様な人間を受け入れるために、高度に人としての成熟が必要なのだ。

「私は。後悔しているのかな」

彼女は、カウンセラーのことをどう思っているのだろうか。

良き大人に期待しているのだろうか。あるいは、良き大人に失望しているのではある

まいか。

そうであってほしくはないが。そう思っているのだろうか。

「ランプの魔人が、万能の願望器が目の前にあったら、どうすればいいかなんて決まっている。助けはいらない。そう答えるのがベストだろう」

「どうしてですか？」

「そんなものに頼る以前に、自力で欲しいものは手に入れることができるのが健全だと思ってる」

確かに、カウンセラーには、彼女の言い分を理解できないでもない。

一般に成功者と呼ばれる人間が、ランプの魔人に頼る、ということを想像しにくい。彼らは既に夢を叶えるだけの力と、自身の手に負えない夢を持たない、という自制ができるものと考えられる。

ランプの魔人は、宝くじと同じだろう。当たると嬉しいが、後に幸福になるかは本人次第。

だから、自身を幸福にできるだけの力を、既に持っているのが望ましくあるのだが。

それを全ての人に望むのは間違っている。それができないから、彼女はここにいるのではないだろうか。

「分かってる。そんなことは贅沢なんだって」

叢雲は首を振る。

「思いが叶うだけで私は幸福で、幸せ者なんだから」

カウンセラーは、彼女が幸せそうに見えないのだが。ひよつとしなくても、彼女は幸せと言うものを求めているのだろうか。

そして、しばらくして口を開いた。

「ただ。ランプの魔人のような。神様転生、神様は、あつては欲しいと思うし、ジョークとして必要なものだと思っている」

神か、とカウンセラーは考える。

彼女の場合、願いを直接叶える神、ということになるだろうか。ギリシャ神話のピグマリオンのような話もあるが、あまりいい印象を抱かない。

神に近いものであれば、彼女の言う所のランプの魔人の伝承、あるいは、ファウストのメフィストフェレスに代表される悪魔が挙げられる。

彼女の言う創作物にもそういった信仰、あるいは伝統があるのだろうか。

「だから。だからこうして、妄想で世界を塗りつぶして正しかったと思うわ。こんな世界になって、私は正直嬉しくないし、面白くもないし、何より、誰も喜ばないけど。それでも、こうして正解だった」

「正解、ですか」

カウンセラーは彼女が曲がりなりにも、自らの行いを、この世界を肯定しているのに少し不思議に思った。

「だって世界は、塗りつぶさなきゃ、塗りつぶされるのだから。自分がやらなきゃ、塗りつぶされるのは自分なんだ」

思い通りにいかない自分、思い通りにいかない世界を見て、嫌になり否定するのはよくあることだ。

「だから、私が世界を塗りつぶしたのは、過ちではあるけれど、間違いじゃないんだから」  
彼女は自らの行いを肯定していないと思っていた。

だが、彼女は、彼女なりに自らの行いを肯定しようとしているようだ。

彼女は自身を認めてはいないが、世界を認めている、ということなのだろうか。

## 4. GHOST BRIDGE

あれからカウンセラーは友人と話をし、ゲームに関連深いと思われる彼らの文化、所謂オタクの文化について調べてみた。友人は私がオタクの文化に興味があると聞くと、喜んで情報提供をしてくれた。いくつかの参考文献を貰い、調べてみたが中々に興味深い。

文献の中には、叢雲の語りの中で、彼女が恐らく参考にしたであろうものもあり、彼女への理解がより深まったような気がした。

友人との話の中で、艦を美少女にするゲームについて、つまりは艦隊これくしょんについて聞いてみてみた。

艦隊これくしょんというゲームについては、当然というか予想通り、知らないという答えが返ってきた。しかし、似たような戦艦を少女にしたゲームについては知っているときた。

そのゲームは、かつてネット上で人気を誇っていたゲームであるという。今はネット環境の衰退もあって、媒体を変え、細々とした活動に留まっている。が、非ネットの環境の中で根強い人気がある、らしい。

そのゲームには、奇妙な噂が存在している。曰く、このゲームが流行するにあたって、何者かによって存在を消されたゲーム<sup>①</sup>が存在するらしい。あるゲームの消滅がきっかけとして、このゲームが大流行することになったそうだ。しかし、誰もそのゲームのことを知らない。

何故なら、何者かは自分たちの頭の中を操作することにより、存在そのものを消してしまつたから、という一種のオカルトである。

消されたゲームは、間違いなく「艦隊これくしょん<sup>②</sup>」であろう。友人との会話の中では出さなかつたが。

彼女の言つたことが現実すぎて、頭が痛い。

友人には何故そんなことを聞くのかと聞かれたが、仕事上、艦娘というものとかかわっているのだと答えるところまで程度納得してくれた。

友人は、戦艦の少女と艦娘は、直接何かしらの関係があるのでは、と疑っていないようであつた。しかし、興味深いコメントをしてくれた。曰く、「彼女たちは萌えそうでもない」のだと。

突っ込んで訪ねてみると、艦娘は戦艦の少女とアイドルに似ているが、そのどちらでもない存在である、とのこと。リアルではあるが、リアリティのない存在。それが、艦娘だそうだ。

彼に限らず彼らは艦娘が苦手らしい。何故なら、艦娘のことを意識すると、戦艦少女のことを楽しめなくなるから、だそうだ。

現実ではあるが、現実感のない。思い当るところはある。それは恐らく、艦娘がやけに頑丈で死にくい所や、彼女らの正装であつたりするのだろう。

カウンセラーも少しは彼女らと彼らについて理解できただろうか。

しかし、オタク趣味というものは、今一つカウンセラーには共感しにくいものであるのだが、彼女もそういう趣味を持っていたのだろうか？

少し、違和感がある。何か、彼女の人となりと一致しないような気がする。

「叢雲」のイメージと合わない。彼女は、イメージを大事にしているようである。オタクの言葉が差別的なニュアンスを持っている以上、彼女をオタクと呼ぶのは憚れる。

彼女と話をして、そのことを確かめてみるのもいいだろう。

そうして、今日もカウンセリングが始まる。

さて、カウンセラーは知り得た知識を基に、叢雲へ接近しようとして試みる。

先日の話の続きであつたり、戦艦の美少女のことであつたり、オタクについてを話してみたのだが。

「そう。よく調べているわね」



彼女の反応は非常に淡泊であった。

「あまり、興味なさそうですね」

それに、叢雲は鼻を鳴らす。

「私は自分のことをオタクだとは思ってないし」

少し、叢雲は考える。

「マニアとなら言われたことはあるけど。自分は、そっちの方がしつくりくる」

「愛好する者ではなく、執着する者、とういことですか」

「側から見ればどう違うのかとは思うのだけだね。多分、こっちが適切でしょ」

オタクとマニアがどう違うのかと問われても、カウンセラーは解釈が人による、と答

えたい。

彼女をマニアとするならば、どう表現したものか。オタクが艦娘を一般的に好み、愛しているとするならば、彼女もまた、好み、愛しているのだろう。ただ、彼女の場合は、艦娘に固執している、と表現するべきなのだろうか。

そこで、カウンセラーはかねてから疑問に思っていたことを聞くことにする。

「普段叢雲さんは、どうやって過ごされているのですか？ 例えば、趣味とかどうしてま

すか？」

死にたいと思う人間にも、日常はある。艦娘でいえば、仕事の時と、仕事以外の時が

あるわけだ。彼女は仕事以外の時に何をしているのだろう。

苦痛に感じる日常を、どうやって紛らわせているのだろう。

「まあ、あるけど。クラシックを聞いたりとか、あとはゲームしたりとかね」

「クラシックは分かりますが。ゲームは普段、どんなのをやってみましたか？」

クラシックについては、まあ、いいだろう。言うならば、恐らく「叢雲つぽい」からだ。こつちを聞いても、飾った彼女を聴いてしまうような気がする。

彼女自身により近いのは、ゲームではないかと当たりをつけ、聞いてみることにする。「ゲームは、あー。うん、自分はパソコンでゲームするのが昔からの習慣だったわね。今は自粛しているけど。初雪とか夕張あたりに誘われてすることはあるわ」

叢雲は俯く。

「二人では、パソコンでローグライクとか。皆とやるときは、皆でできるゲームを、まあ、スマブラだとか、桃鉄だとかをやるわね」

「ローグライクですか」

「不思議なダンジョンって知らない？ シレンとか、トルネコとか、ディアボロとか。それに類するゲームをこつそりやってんのよ」

彼女はそつぽを向いた。

「知らないなら気にしなくていいわよ。知らない人に説明するほど、知ってほしい訳で

はないし」

「説明したいなら、私はそれで構わないのですが」

彼女の台詞からは、説明したいという気持ちが見えている、気がする。

「アンタ。じゃないわね。御免なさい。先生、えーと」

しばらく、叢雲は言葉を選んでいるようだ。

「遠慮しとくわ」

それに対して、カウンセラーは苦笑する。

「私はいいのですけどね。普段、叢雲さんは地が出せないのでしょうし」

「別に。結構、普段から地は隠せてないのだし」

叢雲はため息をつきながら、言葉を紡ぐ。

「ただ。知らない人に知識をばら撒いて、これが知識人のすることなんです、って自慢顔しても、私は賛同できないのよ」

カウンセラーは、それはどうかな、と思った。

それはそれで、*“楽しい”* ことなのではないかと。彼女の場合は特にそう思える。

「兎に角、知りたいなら、自分で調べて頂戴。ゲームの話題はあまりしたくないわ」

まあ、本人がしたくないと言っているので、無理に強要することはないのだが。艦こ

れの話なら進んでしそうではあるのだが、ここら辺は不思議である。

「趣味と言えば、先生はどうなの？」

叢雲はそう聞き返す。

「私は映画やロックを鑑賞するのが好きですね。後は、旅行とか。ですかね」

「どれもいいものね。私も好きよ」

カウンセラーとて人間だ。休日はよくツタヤでCDやDVDを借りて、鑑賞している。旅行に関しては、最近はあまりできていない。

実は深海棲艦のせいで、長距離の旅行ができなくなったのはちよつと残念に思っている。

「映画といえば。先生は、君の名は、は見たかしら？」

「ええ」

先日公開されて、異様に長く上映されている映画の名前が話題に上がる。

「あれは良かったわねえ。恋愛ものつてことで敬遠していたけど。素敵な恋だったわ」

その点に関しては、カウンセラーもそう思う。アニメ映画で、あそこまで心動かされるとは思ってなかった。

「ただ。入れ替わりとか、観てて恥ずかしくなるタイプのTSだったわね」

「TS、ですか」

叢雲は顔を上げる。

「TS、つまりトランスセクシュアル、性転換。らんま1/2とか、おれがあいつであいつがおれで、つてあるでしょ。あれみたいに、男女が入れ替わる作品のことをTSつていうのよ」

「なるほど」

ゲームの話はしたくないが、この話題は彼女の興味をひくらしい。

「君の名は、の流れは美しいわ。男女が、時空を超えて、互いに入れ変わり、離れ、繋がり、理解しあう。まさに、美しい愛の形だわ。観てて恥ずかしかつたけど。TS作品として見ても秀逸だったわねえ」

「はあ」

そこで沈黙が流れる。

「あまり人には言いにくいけど。私はTSが好きだったのよ。ゲーム以上に恥ずかしい趣味だけど」

「ゲームもそうですけど、どうしてそこまで恥ずかしいと？」

カウンセラーは、彼女に恥の気持ち異常に強いよう感じる。

日本は恥の文化だというが、彼女のその気持ちはどこから湧いてくるのだろう。

「現実もそうだと混同されたら、困るからよ」

彼女は俯く。

「それは、相手が幼稚ではありませんか」

ゲームをやっているから殺人を起こすだとか、オタク趣味だから現実でもだとかを思い起こす。現実はそのことないのだが。

世間で言う異常者がゲームや虚構の世界に入り込むのは簡単だ。彼らの望む世界がそこにあるからだ。

だが、その逆はない。虚構の世界を好むものが、その世界を望むとは限らない。

その逆を思うのは、単にゲームや虚構の世界をよく知らないためで、知らない故に怖いからだろう。

「そうね。でも、口に出す連中は、口に出すでしょ?」

叢雲は薄軽く笑う。

「叢雲さんは、現実と虚構は対立すべきものと思っていますか」

彼女は少し戸惑った反応を見せる。

「違うの?」

「現実と虚構の対比はありますが、思想的には少々古い考え方になりますね。現代の思想では、現実と虚構は対立するものではなく、現実も虚構の中にあり、また、虚構も現実の中にあるとの見方もあります」

この話はカウンセラーにも難しい話ではある。ただ、決して現実の世界だけが我々人間が生きる世界ではないのだと、この話を聞いていて思ったものだ。

現実の上にある映画やロックの世界に、生きるものがいたっていいものだと、そう思ったのだ。

「現実と虚構か。虚構も、私の生きる世界であつたのなら、どれだけよかつたのだろうか」

叢雲は自身の髪を掴む。

「私は、それでも、現実に生きるのを望んだんだ」

そうして沈黙が再び流れる。

「考えると、TSってジャンルは謎よね。なんで私、ここまで好きだつたのだろうか」

カウンセラーはここで聞きに徹する。

「私も詳しいわけじゃないけど。恐らく、こういった嗜好の前提には、『虚構のものを愛せるか』が関わっているのだと思う」

虚構のものを愛すること、つまりは現実でないものに、重きをおけるということだろう。

「何か、分かりやすい例って何かしらね。ああ、先生はツンデレってご存知？」

「確か、普段は好きな異性に辛くあたっているけど、時たま優しさを見せる、ような人物

の傾向でしたっけ」

カウンセラーはその言葉を知っている。

「そういや、高校の部室にツンデレカルタなるものがあつたなあ、と思ひ出す。

あれは酷かった。

「現実となると好きな人間は別の、少数派にあたるのではないかしらね。いや、意外といえるかも。たとえば、普段は暴力男だけど、時々優しい男に惚れる女、とか」

「そ、それは納得できませんが」

まあ、それも一種のツンデレだろうが。

それをツンデレと呼んでいいものか。

「そして、虚構のツンデレを好む人間は、それとは違うはずだ」

それはカウンセラーも思う。

それに実際にツンデレな女性と付き合うのは、ちよつと、と思う。こういつてなんだが、プライドの高い女性は付き合ってみると面倒臭いのである。

「現実のものを愛するか、虚構のものを愛するか、それらがどう違うのか。私には分からない。どちらも、尊重されて然るべきだとは思うけど」

叢雲は首をかしげる。

「話を戻そう。TSの醍醐味は、恐らく、男性が女性になることに、あるいはその逆であ



ることで、理想が完成するからだろう」

叢雲は俯き、髪をかき混ぜる。

「聞いた話だけど、そもそも変身という行為には、例えば魔法少女とかがそうだけど、未熟な存在からの完成、を意味するらしい」

例えば、魔法少女を少し考えてみよう。彼女らは普段、日常に生きる未熟な少女だ。しかし、危機に瀕すると変身を行い、戦う存在へと変わる。つまりは日常からの脱却であり、それが彼女らの願望であるのだが。

「つまりTSを求める人にとっては、男性であった女性、あるいは女性であった男性の姿が、未熟な存在から成熟した、“完成された”存在であるのだろう」

TSされた存在もつまりはそういうことだ。日常を生きる未熟な存在が、変身により完成された存在となる。その完成は、本人が望んだことかもしれないし、望まないこともあるだろう。その場合、その完成は、読者や作者が望んだものであるのだろう。

「現実的な話、性転換手術なんかを受ける人は、性同一性障害だけだとは思えない。別の性を生きることは、その人にとってそれだけの価値があるはずだ」

そこで彼女はため息をつく。

「なぜ、それが完成された姿なのかは、私には分からないけど」

カウンセラーは少し考え。

「なるほど。実に興味深い話であると思います」

頷きながら、そう答える。

「フランス哲学、だったと思うのですが。本来、人間とは男性的なものと、女性的なものを両方兼ね備えているそうです。つまり、男性的なものだけを持つ存在から、女性的なものを持つことで、人間という存在の完成を目指している、のだと思います」

ここで言う男性的なものとはジェンダー的なもの、文化的な男らしさや女らしさといったものかもしれない。あるいはセクシュアリティ的なもの、生物学的な男らしさや女らしさといったものかもしれない。

「そして、叢雲さんもそうである」と

どっちにしろ、彼女は現実で男性でありながら女性的なものを求め、艦娘へと変わったのだと考えられる。

「そうなのだと、思う」

少し、叢雲は考え。

「ただ、私は未だ、未完成のままだ」

そして呟く。

「私は、この姿になるにあたって、完成された理想、というものを持たなかった」

それは、カウンセラーが前にも聞いた話だ。

「前も言ったけど。理想の自分に、現実の自分を近づけることに、一体どれだけの価値があるのだろうか。憧れの人と同じ服装をすること、厚化粧を塗ること、整形手術を受けること。そして、自分だけの神に理想の体を求めること」

なるほど。前回は理解できないでいたが。今回は理解できた気がする。

「その人にとつては、他人をぶち殺してでも叶えたい願望なのだろう。だけど、いくら現実を変えようとしても、それが笑われるのならば、それに価値があるとは思えない」

彼女は虚構と現実を混同しているのだ。

彼女はTSされた存在を本来、虚構の存在とみなしている。

そして、TSを現実を持ってきたことをみつともないとも思っている。

虚構と現実の混同を恥じる理由は、犯罪者を連想させるからだろうか。

「だから、私の正体に関しては、本当に人に言いにくいだよ」

カウンセラーはその言葉に疑問を持った。

「最初からそうですけど。私は良かったのでしょうか」

言いにくいなら、言わないでいい。

だが、何故、ここまでカウンセラーである自分に語るのか。

「私は、先生、というか。カウンセラーという人種のことを信頼しているわ。貴方たちは、鏡よ。自分というものを見せるために、貴方たちは自分を語らせるのよ」

カウンセラーはドキリとした。

思った以上に、彼女は自分たちをよく見ている。私たちは、語らせることで、正しい認識を目の前の人に期待しているのだ。

注意せよ。ニーチエ以降から言われていることを。

深淵を見つめるとき、深淵もまた、お前を見つめているのだと。

彼女が自分を見つめるのは不思議ではないが、彼女を見ていると、まるで自分が見られているような錯覚を覚え、気分が悪くなる。

## 5. ナーシサス次元から来た人

カウンセラーは前回のカウンセリングではつきりしたことがある。この艦娘とのカウンセリングは、通常のカウンセリングと同じ危険が伴うのである。

この職業について友人の一人は「かわいいねーちゃんと話をして、お金が貰えるとか最高かよ」とかほざいていたが、全く冗談ではないな、と今更ながら痛感する。

クライアント中心療法の祖であるロジャーズ曰く、「悩めるその人がどうすればいいかは、その人自身が一番知っている」とのことである。つまり、コミュニケーションを取り合い、本人の悩みの答えを本人から引き出すことがカウンセリングの目的であるのだが。

目的達成のために、カウンセラーはクライアント（患者）に対して、「あなたのことを理解していますよ」ということを理解させることが、治療への必須条件の一つとされる。

ここでの問題として、精神疾患を抱えた人間は、基本的に精神疾患を抱えた人間のみによって理解され得る、ということである。つまり、障害による人間の苦しみは、同様の障害を抱えた人間によってしか理解されない、ということだ。

カウンセラーも、カウンセラーの道を選ぶだけの精神疾患を持つていた。彼は夢を追いかける途中で障害にぶつかり、カウンセラーの手を借りることでそれを克服した。彼は人間というものに人一倍敏感であった。

しかし、艦娘のカウンセラー倉橋佳樹は、どうしようもなく人間である。

つまり、艦娘ではない。それ故、彼は艦娘を理解できるかどうかの不安を抱えていた。艦娘の問題は、艦娘でしか解決できないのでは？ と。彼はそういった疑問を抱えながら、カウンセリングをこなしていたのだが。

彼は、結局のところ、艦娘を自分たちと同じ人間であると、見なすことができなかつたのだ。

さて、彼としては艦娘が本当に、人間なのだろうかと問いてみたかつた。かつての兵器の名を名乗り、人間離れた美しき姿を持ち、砲弾で撃たれてもいずれば元通りになる頑強さを持つ少女たち。ある人は、彼女らを進化した人間だと、ある人は、人には過剰な力を持つ化け物であるとしている。彼女を人間としていいのかは、マスコミや思想界において、艦娘が現れた時から延々と議論の的になっている。彼も、知識人の一人として疑問を持つていただけである。

そんな中、カウンセラーの目の前に姿を現したのが、始まりの艦娘たる叢雲であつた。彼女は、人間とは遠い容姿と力を持ちながら、明らかに普通の人間に憧れていた。そ

して、本人は自分を偽り、暗く語りながら、こつちをじつと見つめている。

彼にとつてその姿は、奇怪であった。何と言うか、こう。こみあげてくるこの感情がなんなのか。彼はその姿をどこかで知っている。

そう、人間の姿だ。

彼は、艦娘のカウンセラーになって、初めて艦娘の中に人間を見出したのだ。彼と艦娘は、人として分かり合えるのだと。

さて、問題です。人間として彼女を理解するとき、貴方にある問題が発生するのです。それは何でしょうか？

正解は、貴方も彼女の精神疾患に引つ張られる、ということでした。彼女の精神疾患を理解できてしまうが故に。つまりはニーチェの深淵だ。理解できるだけ、素養な十分にあるのだから。

カウンセラーがカウンセラーであるために、彼はカウンセラーであるべきだ。何が言いたいかと言うと、自分を保たなければならぬのだ。自らの仕事を、自らの立場を、自らの姿を見失ってはいけない。彼女のように、自分を見失ってはならないのだ。

そうした決意のうち、今日もカウンセリングが始まる。

今日の叢雲の様子は、何と言うか、不安のようだ。カウンセラーをまつすぐ見つめながら体をゆすり、落ち着きがない。

「最初に言っておくけど。前回は、えーと。その。御免なさい。あんなことを言うなんて、私もどうかしてたわ」

そういつて彼女は謝罪する。前回の発言を恥ずかしく思っているようだ。

「これまでは、そう、自分のことばかり話して気がするから。少し、楽しめるような、明るい話でもしようかしら。暗い話ばかりだと滅入ってしまうわ」

「そうですか。私としても、そういうのは歓迎ですよ」

カウンセラーとしては、もっと彼女たちには人生もとい艦生を、楽しんでもらいたいと思っている。

勿論、全ての人がそう思えるだけの感性や余裕がある訳ではないと、彼は知っている。特に、彼女らは自称するに兵器であり、軍人なのだ。

それでも彼は、人の幸せが彼女たちにあるのだと思いたい。戦闘美少女としての戦いだけが、彼女らのすべてではないのだと。

身勝手な思いではあるが、彼女たちと、もっと分かり合えても良いのではないか？

「そうね。前回の映画の話のような、話ができるといいわね」

理解できることを互いに話し合うというのは良いことだ。理解されることが孤独へと繋がるのなら、調子が乗れば、自信の復活もつながるだろう。

「私。ウォッチメンっていう漫画、アメリカンコミックだけど。それが好きなんだ」



「ウォッチメン、ですか。映画で見たことがあります」

「あら。知ってるのね。良かった。嬉しいわ。私は映画で見てないのだけど」  
ウォッチメンのストーリーはこうである。

スーパーヒーローが実在し、なおかつヒーローの活動が法律で禁止されている冷戦期のアメリカ。その中で、違法に活動しているヒーローであるロールシャツハは、ヒーローの一人、コメディアンが殺されているのを発見する。彼はそれをヒーロー狩りだと思いい、かつての仲間に知らせていく。そうした中、一人、また一人とヒーローが消えていく。そうして、ロールシャツハは捜査を進めていく内に、ある男の恐るべき計画を知ることになる。

そして、物語は終結し、未来はある人間によって託される。

「何回も読んで。今でもたまに読んでるわ。艦娘になつてから、取り寄せるのには苦勞したけど。かつて自分が持っていたのは知らず間に処分されてしまったから」

まあ、単純明快なヒーローものとしては楽しめないであろう作品だ。カウンセラーの評価はまずまずだったが、一緒に見た友人からの評価は悪かった。友人はもつとヒーローが活躍するのを見たかったらしい。

外部評価は高いが人を選ぶ作品であり、恐らく感受性の高い人に向く作品であると思われる。

「ねえ。先生はどう思った？」

少しカウンセラーは考える。ここは、正直であるべきだろう。

「映画館で見たのですけど。正直、よく分からなかったんですよ」

映画でのウォッチメンは難解だった。情報があまりにも多く、全てを理解できたとは思えない。

「まあ、しょうがないかな。あの作品は精密だから。一度で全て理解できるとは思わないわね」

いくら言葉を並べても、言葉を絞らなければ相手を混乱させるだけである。

映画化にあたって、ウォッチメンは幾分簡略化されていたが、それでも難解であった。

「だから、何度も見る価値があるのだと思うのよ」

「なるほど。今度、もう一度見てみます」

カウンセラーが思うに、作品にそれだけの価値が彼女にはあるだろう。

良い機会だ。ツタヤで借りてもう一度観てみることにする。

「こんな質問、下らないかもしれないけど。誰が一番好きだった？」

ウォッチメンにはいろんなヒーローが登場する。

古き良き時代、ミニッツメンのヒーローたち（大半が悲惨な最期を迎える。コメディアンも含める）。

歩く核爆弾、実在した<sup>スーパーマン</sup>神たるDR・マンハッタン。

大富豪にして慈善家、人間の最高峰、オジマンディアス。

どうしようもなく普通のヒーローとヒロイン、ナイトオウル二世にシルクスペクター二世。

そして、作中では異端のヒーローにして物語の語り部であるロールシャツハ。

「やはり、ロールシャツハですかね」

「ロールシャツハか。作者の一押しキャラね」

ソフト帽とトレンチコートを着込み、顔のマスクにロールシャツハテストの模様を浮かばせるヒーロー。

それが、ロールシャツハだ。

「間違いなく、あれはヒーローと呼ぶには相応しいだろう。確固たる意志を持ち。決して諦めず。神に対面してなお、己の意思を通す」

違法とされているヒーロー活動を独自につづけ、正義を求め続ける人間。悪に対して一切の容赦がない。

アメリカはもとより、日本での人気も高いらしい。

「格好いい？ あれが」

それを叢雲は鼻で薄く笑う。

「違うのですか？」

「個人的には、嫌いだよ」

少なくとも、カウンセラーにとってあの姿は格好良かったのだが。

「作品の中で出てくる、『WHO WATCHES THE WATCHMEN?』（誰が見張りを見張るのか）という言葉は、彼のために用意されているのだと思わない？」

ウォッチメン世界は、ヒーローに厳しい。マントが回転ドアに挟まって銀行強盗に射殺されたヒーローが居るくらいだ。

ヒーロー活動が法律で禁止されたのも、警察がヒーローの自警活動に対してストライキを起し、市民がパニックになったからだ。

「つまりの所、あんなのが現実になったら、溜まったものじゃないってこと。ヒーロー気取りなんて、市民や警察に嫌われて当然よ」

ロールシャツハの存在は違法であった。アウトローと書けば格好良いかもしれない。だが、そのものは管理されていない獣と同じだ。社会にとっては害獣だったのだから。

「でしようね」

「ただ、彼は、気取る余裕など、人に気を使う余裕など。もう、残っていないのは知っているけど」

ロールシャツハは、一般に言う狂人であった。彼は正義に取りつかれてしまっている。

だが、その姿こそが格好良かったのかもしれない。カウンセラー風に言うならば、彼の姿は最高に「ロツク」だからだ。

「どのような理由であれ、正義の味方など、なるものではないな」

叢雲はそう溢す。

「自分は、自分の味方であるべきなのだが。彼もまた、人間の悪に対して、一倍敏感で社会に耐えきれなかったのだらう」

そこで、カウンセラーは考える。

「あの世界は好きですか？」

「ええ。あの世界は、最高の出来の、最悪の冗談だった」

冗談。冗談とは何か、まだ理解できていないが。それを体現するかもしれない人間が、ウオツチメン世界にいた。

「コメデイアン」

叢雲が止まる。

「好きなのですよね」

叢雲は、頭をかき混ぜた。

「今、思えば、私も恥ずかしいことをしたものだね。何かにつけて、冗談だなんて、ジョークだなんて。理解されたいという要求に、私も、毒されすぎているようだ」

「理解されたいというのは、人として当然だと思いますが」

理解され、尊重されることは、人は嬉しく思うものだとかウンゼラーは信じている。

「自分が思うに、コメディアンは、唯一、尊敬するヒーローなのだ」

叢雲は俯く。

「素敵なヒーローなんて、今時、そこらじゅうにあふれている。だが、彼のようなヒーローは中々いない」

確かに、彼のようなキャラ自体は少ないだろう。そして、彼のようなキャラを好む人もまた少ない。

「彼は、控えめに言っても、最低だろう。戦争で活躍し、女子供を容赦なく撃つヒーローがいるか？ 仲間をレイプしようとするなんて、論外だ」

コメディアンはヒーローと言うより諜報員で、汚れ役であった。

彼は、法律でヒーローが禁止された後も、政府に活動を許されていた。何故なら彼は政府の犬だったからだ。

「ただ、この惨劇が人心に、どのような影響を与えるのか。理解できる人間は極めて少ない。例外はブレイクだけだ。彼は完璧なまでに理解している。そして、気にもかけて

いない……。人類に潜む悪を見て、発狂したのがロールシャツハで、それでも笑っていたのがコメディアンなんだ」

叢雲は顔を上げ、カウンセラーの眼を見つめる。

「自分が彼を好きない理由はそこにある。私が言いたいことは分かる？ 先生？」

そこでカウンセラーは沈黙する。

彼女がコメディアンを好きだと言っている理由は、まだ、理解できないでいる。

「ねえ。先生、私の言ったことを覚えている？」

「色々あると思いますが、どれでしょう？」

それを聞くと、彼女は口を開け閉めする。

「ほら、いくら好きなロックミュージシャンの恰好を真似して同じ台詞を吐こうと、その人になることはできないだろう」

可笑しいテンションで、彼女は答える。誰かを真似するように。

「コメディアンは、自分の完成形足りえなかった。だけど、大いに参考にすべきだと思う」

カウンセラーにはすべてを理解することはできない。コメディアンではないのだと、彼女の完成形とは何かと、まだまだ問うてみたいことはたくさんある。

ただ、彼女が彼女なりに、コメディアンという生き方をリスペクトしようとしている

のは明らかではあった。

「結局は、彼の言うとおりであるのだから。結局、この世界の全ての悪いことが、全て、冗談にすぎないと気づいたのなら、コメディアンになるしかないのだと」

「それならば、コメディアンにはなろうとはしないと、どういう？」

そこで、叢雲は少し沈黙し、俯く。

「私はコメディアンにはなれない。彼のように、人間という獣に正直であることも、彼のような切れ者であることも、あとは、彼の恰好を真似することも。どうであれ不可能だと思っっている」

彼女の基の彼も、ひよつとしたら、コメディアンには成りたかつたのだろう。だが、何かしらの思いで、コメディアンになることは無理だったのだろう。

「ただ。ただ、私は知ってしまったのだ。世界がどうであれ、コメディーではあるべきだとは思ったんだ。そして、もう、戻ることはできないのだと」

何が、彼女をそこまで固執されるのだろうか。

「冗談だと思うでしょ？　でも、これは私自身、本気だった。この世界が私なりの冗談だったのは」

冗談とは笑いごとではないのだろうか。何を笑わせようとしているのだ。

「だって、そうするしか、私は」



そもそも、彼女は何を相手にしているのか。

「この苦しみが、誰にも伝わらないのだもの」

何が冗談なのだろう。この世界の何が、一体冗談とは。

カウンセラーにはまだ、理解できないでいた。

そしてそれは、これから理解することになる。

## 6. 万象の奇夜

あれからカウンセラーは、ツタヤでウオッチメンのDVDをレンタルし、繰り返し見てみた。

それだけでは分からなかったので、ネットの感想、考察を読んだりもして見た。分かったこととして、あの作品は作品自体が最悪のジョークであるらしい。

最悪のジョークとは、映画の中に出てくるヒーローもヴィランも、善も悪も、全ては冗談にすぎない、ということらしい。

この冗談、というのは今一つ、カウンセラーには理解しがたい概念ではある。

だが、決して心当たりがないわけではない。映画では触れられていないが、漫画では語られた、ある概念。

つまりは、ニーチェの哲学であるのだ。

神は死んだ、との言葉で語られるニーチェの哲学。存在することの無と超人への憧れを語った異端の哲学者の言葉。あまりにも有名すぎて、当たり前となってしまう概念。

つまり全てが冗談とは、この世の全てが無であるというニヒリズムである、と解釈で

きないか。ヒーローの価値が死んでしまった世界、つまりキリスト教の神が死んでしまった世界、物事を単なる善と悪で判断できなくなった世界が、あの世界であるのだから。

そう考えれば、コメデイアンとロールシャツハの行動も理解できる気がする。何も信じるものの無い世の中で、神を信じながらも好き勝手をするコメデイアン。禄でもない世の中を見限り、自分の信じる正義を突き通そうとしたロールシャツハ。

とはいえ、なぜ、彼女がウオッチメンの世界を、コメデイアンを好いたのかが理解できない。何故、この作品なのだろう。言つては何だが、この娯楽天国である日本では、善と悪の無意味さに拘った作品など、いくらでもありそうなものだが。

というか、彼女の嗜好がちよつと分からない。艦これとウオッチメンってどういう組み合わせだろうか。カウンセラーの想像でしかないが、ウオッチメンの世界観と、艦これの世界は違いすぎるのではないか。

だが、二つの世界の影響を受けたであろう、この捻子曲がつたこの世界こそが、彼女の生きる世界だとしたら。

「となると、この世界も、冗談なんでしょうね」

世界に艦娘がいることも、人が艦娘になることも、彼女が艦娘であることも、全く何の意味もない。

そして、それは彼女にだけ価値がある。

カウンセラーが思うに、彼女はコメディアンというより、ロールシャツハに近いのではないかと思ってしまう。コメディアンを尊敬しているところもそうだが、恐らく、この世界の冗談を見て、笑えなかったのであろうから。

とはいえ、彼女がロールシャツハのようになっても、それは決して不思議ではないのかもしれない。今ここが、我々の生きる世界なのだから。それに耐えきれなくとも、全然不思議なことではない。

カウンセラーの考察を聞いた叢雲は、ひどく、蒙昧な表情をしていた。

「頭が下がるわ。自分の、台詞に対して、ここまで考察してくれる人は、中々いないから」  
叢雲はゆっくり頭を下げる。

「正直。先生には、感謝、しているのよ。ここまで自分を見つめてくれる人は、本当に、いないから」

「そういつてもらえると、私も頑張った甲斐がありました」

やはり、貴方のことを理解している、ということを伝えることはいいことだとカウンセラーは思う。

これなら、自信の回復にもつながりそうである。

「うん。じゃあ。先生。あなたはこのジョークに対する回答は？」

そこでカウンセセラーは再び考える。

ニーチェのニヒリズムは、神の死、あらゆる物の価値が無であることから出発する。ここで大事なものは、これは出発である、ということだろう。

神が死んだ、じゃあどうするのか。つまり、新しい価値、新しい神を各々が見出さなければならぬ、ということである。

彼女にも、何か、価値のあるものを示さなければならぬだろう。

「どうぞで」

そこで、カウンセセラーはつい最近、自分が読み終わった、一冊の本を差し出す。

「読め、と?」

叢雲は本を読み始める。

「スピリチュアル、か」

本の初めと、最後の部分だけを読んでいるようだ。

「ふん」

目を細めじつとカウンセセラーを見つめ、不機嫌そうだ。

なんだか蔑まれているような気がする。

「答えが、スピリチュアル、か。そうかそうか」

天を仰ぎ、深いため息をついた。

「ま、いいわ。詳しくは帰ってから読むわ。借りるわよ」  
そうやって本を手元に置く。

不満そうだが、一応は受け取ってくれるらしい。

「お気に召さなかったですかね」

「答えとしては、悪くないとは思うけどね」

時計のコチコチ音が聞こえる。

「ただ、スピリチュアルでは、私は救われないのよ」

「そうですね。現在の日本で、精力的に活動を行っている人の本なので、何かの御役に、と思ったのですが」

カウンセラーとしては、感性の強い彼女のことだから、この本を読んで、何か感じるものがあれば、と思ったのだが。

スピリチュアルと侮るなかれ。信じる物は救われるのだ。彼女に何よりも必要なのは、信じる物だと踏んでいる。

「別に、偏見とかじゃないわよ。実体験よ」

カウンセラーはほう、と思った。

「叢雲さんは、スピリチュアル的なものを体験したことがある、と」

「そうよ。といっても、大分昔の話よ」

叢雲は再び、深い溜め息をついた。

「自分が、大学にいたころ、そう、スピリチュアル的、というより、宗教的な人が居てね。私はその人と触れる機会があったのよ」

カウンセラーは大学で宗教と言うと、アレを思い浮かべるのだが。

「ひよつとすると、それ、カルトだったりしません？ カルトが悪いとは言いませんが」「ああ、そんなんじゃないのよ。ある意味宗教的ではあったけど、本人は宗教を否定していたし。まあ、だから、あー。スピリチュアル、でいいと思うわ」

どうやら、本人曰くカルトではないらしい。

ここでは、素直に彼女の言葉を受け止め、宗教的でないスピリチュアルの専門家と出会った、と受け取っておこう。

「その頃の自分は、その人に啓蒙されて、スピリチュアリティに目覚めたのよ」

大学でスピリチュアルに目覚める、というのはカウンセラーには上手く想像できないのだが。

とはいえ、そこまでおかしい話でもないのかもしれない。

例えばだが、哲学か何かの講師が、そういう話を語る、ということがあったのかもしれない。

「あのころは、楽しかったわねえ。今までの自分から抜け出せると、信じていた。自分に

は未来があると、まだ信じていることができていた」

「彼、にも、そういう時期があったのですね」

少し、カウンセラーは不安に思う。恐らく彼女の口ぶりからして、話の続きはよくない方向に傾くのだろう。

「ただ、ある日、気づいたんだ。気づいてしまったんだ」

叢雲は俯いた。

「誰も自分と同じものを求めているないと、スピリチュアルに目覚めた自分を、誰も求めているのだと」

自分を求めている、と。彼女は強調する。

「例えばだけど普通、身内の人が、新興宗教なんかに嵌まったらどうすると思う？」

カウンセラーは少し考える。

身内が宗教にはまる、というのによく、景気の悪い話として語られているはずだ。

「止めるのではないですかね」

「まあ、普通、止めようとするよねえ。普通だったらそうするわ。自分たちと同じ世界に、引き留めようとするよね」

叢雲は薄く笑い、首をふり、顔を左右に揺らす。

「“あなたは騙されているんだ。それは本当の幸せなんかじゃない” ってね。馬鹿馬鹿



しる」

叢雲は忌々しく、吐き捨てる。

「その人が宗教に嵌まるのは、その人の周りの人が、社会がその人を救ってくれないからでしょうに」

カウンセラーは彼女の言い分はわかる。しかし、普通の人々の言い分もわかってしま  
う。

日本において、新興宗教とは悪名高いのだ。

「宗教は、悪ではないのですけどね」

日本人は宗教のことをよく知らないでいるのが普通なのだろう。

偏見は無知からくるものだ。葬式であったり、お地藏さんであったり、宗教は身近に  
存在するものなのに。

密接すぎて、分からなくなっているのかもしれないが。

「悪でしょう。社会悪よ」

叢雲はきっぱり言い切る。

「宗教は、本質的にとても、反社会的な存在だ。社会は全ての人を救わない。人が人と対  
立し合う構造的に、全ての人の意見を政治に反映させることは不可能であるから」

社会は全ての人を救わない。日本では、民主主義が採用されて久しいが、それでも完

壁ではない。

例えば、待機児童の問題であったり生まれの格差であったり、社会システム故の困難が全てカバーされているとは言い難い。民衆から声が上がらないだけで、他にもいろんな問題も潜んでいるかもしれない。

日本は他の国と比べて幾分マシかもしれないが、それでも最高の社会とは言えないだろう。

「社会で救われない人がいるから、宗教が起こる。キリスト教や仏教だってそうでしょう？ 既存の宗教が、ユダヤ教で、バラモン教で救われない人がいたから、彼らは活動を始めたのでしよう」

だからこそ、宗教なのだろう。

例えば、日本で政党になって与党と連立政権を組んだりすることで有名な某団体は、昭和の頃に農家の二男坊三男坊やら都会に出稼ぎにきた人間を吸収して、大きくなっていった経緯がある。彼らは貧困に喘ぐ彼らを、助け合いと教育によって支援することで、信者を増やしていった。

社会からこぼれた人間を救うことで、彼らは一大集団を作り上げるのだ。

「そしてそれは、既存の社会を壊そうとする試みだから」

勿論、既存の集団からしたら面白くないだろう。集団の中から新たな集団ができるこ

とを彼らは歓迎しない。

集団そのものの母数が減る上に、社会に反抗的な集団ができるのだ。

「だから、宗教は悪とされるのよ。社会によって見捨てられた人の声を無視して、ね。まあ、中には自分の考えを人に押し付けようとする人もいるから、つてのもあるでしょうね。そういうことをする人間は、どの集団にもいるからなあ」

カウンセラーは深く納得する。

「なるほど。詳しいですね。元々そういう仕事をしてたりしてませんか？」

「素人の物好きよ。本で読んだことではないわ」

叢雲はそっぽを向いた。

「ともかく、ある宗教学者が、信仰は歩行具であると言っていた。始めだけ頼るべきものだが、いずれ抜け抜け出さなければならぬものだ」と

宗教は習熟につれて害をもたらすものである。キリスト教然り、仏教然り、イスラム教然り。

宗教は社会集団より生まれるが、宗教が社会を作り出すと、社会になるが故に弊害が生まれてくる。

社会を否定して生まれる宗教が、社会を作るのはある意味滑稽だが。

まあ、そんなものなのだ。

これも、人の業なのだろう。宗教の根は、思ったより根深い。

「でも、本当に抜け出さなければならぬものなの？ 自分には、そこが理解できないでいる」

カウンセラーは、何も言えないでいる。宗教の問題は、あまりにも大きすぎる問題だ。人間は宗教から脱却できるか、と言う問題はことさらに大きい。

人は弱い。弱いからこそ、古代から人間は宗教に依存してきた。

とはいえ、そんな時代も昔のこと、宗教に依存しない人間が主流となってきた。

「人は、皆が皆、強くなれるのかしらね。全ての人間が、皆が同じ、強さを持っていることを強制されるのであれば、そこは、地獄だろう」

だが、宗教から、完璧に脱却できるものなのだろうか。

皆が皆、宗教なしで生きていけるとは、強く在ることができのだろうか。

「話が逸れたわね。あああ。ほんとに、上手く伝えることができないな」

叢雲は頭をかき混ぜる。

「結局の所、スピリチュアリテイの目的は、キリストや仏陀の本来の教えとそう変わらなはずだ。自らに神の国を見出すこと、あるいは悟りを開くこと。つまりは、この世の生の苦しみからの解放だ」

確かにそうである。この世の苦しみに、本人の抱える問題からの解放が、スピリチュア

ルの目的ではあるのだが。

「この世の人は、普通の人は、悟りを開くことを求めているか？」

「逆に聞くけど、求めていると思うの？ 求めているって思うなら、貴方はとんだ、大馬鹿ものね」

そういわれると、納得するしかない。

「そうですね。求めてません、ね」

普通の人間は、スピリチュアルを求めている。最近のスピリチュアルは宗教に寄らないものも増えてきているのだが、それでも一般に受け入れられているとは言い難い。

カウンセラーとしても普通の人間というのは中々難しいと思っている。

学生の頃に、彼らを学ぶ機会があったが、彼らは本心を表に出さず、往々にして靡かない。彼らの心を開くのは、非常に骨であった。

スピリチュアル的に言うならば、彼らもまた、目覚めるべき人間であるのだが。

そういった意味では、目の前の彼女は素直だと思ふ。

ただし、非常に敏感であり、深淵で難解な本心を持っている。

恐らく彼女の闇は、素直すぎるその性格から来ているのだろう。

「連中が求めているのは、不幸でしょうよ。自分の不幸を慰めるために、他人を不幸せざるにいられない人間が、連中なのでしょうよ？」

「そうかもしれないませんが」

「連中が望むと思う？ 悟りを開いた人間だなんて。不幸にできない人間なんて。自分の不幸に靡かない人間なんて。そんな、つまらない皆の玩具オモチャを求めるとかしら？」

カウンセラーは皆の玩具、という表現に嫌悪感を覚える。

人でもあそぶ、という人の姿は、あまり心地よくない。

「私が目覚めて、私が『幸せ』になっただとしても、誰もそれを私の幸せだと認めないだろう。嬉々として、足を引つ張るだろう。変人、あるいは狂人扱いして遊ぶのだろう」

どうして、どうして彼女はそこまで悲観的なのだろう。

「WATCHMENの話の中にこういうジョークがあっただろう。」

ある男が精神科医を訪ねて、こう訴えた。

「私の半生は悲惨の一言だ。もう人生に何の希望も持てないんだ」

「世間だってひどいものだ。先の見えない社会を、たった一人で生き抜く辛さがわかりますか？」

医者はこう答えた。

「簡単な事です。今夜、あの有名なピエロのパリアッチのショーがありますから、行ってきなさい。笑えば気分もよくなりますよ」

突然、男は泣き崩れた。

そして言った。

「でも、先生……」

「私がパリアツチなんです」 ってね」

叢雲はハハハと軽く笑う。

「コメディアンを評したジョークとしては、不適切だけど、とても良いジョークよね」

映画にもあつたジョークだ。秀逸だと思うが、とてもじゃないが、笑えないジョークだった。

「最初はこのジョークが理解できなかったけど、今なら理解できる。パリアツチは何で泣き崩れたか解るかな」

「皆が求めているのは、ピエロの自分であつて、本当の自分ではないのですよね」

精神科医とやらも、あんまりな対応をしたものだろう。世間を笑えない、救いを求めている人間に、皆が求めているのはあなたの笑える姿なんです、と答えたことは。

「そう。結局は本当の自分なんて、誰も求めてはいないんだ」

叢雲は天を仰いだ。

「結局、自分を救えるのは自分だけなのに。皆がそれを邪魔しようとするとは、ね。これじゃあ、本当の自分なんて」

そして、俯いた。

「本当の自分を見れるのは、結局自分自身を支えるだけの力を持った者だけなんだろうな」

ひよっとしなくても、彼女もパリアッチチであるのかもしれない。

何故彼女がそうであろうとするのか。

カウンセラーはどうしたら彼女を救えるのか。改めて考え始めることになった。



## 7. MOTHER

カウンセラーは手元のファイルを見つめ、唸ったり、新しい紙に考えたことをまとめたりしている。

現在、叢雲についてまとめている最中である。

彼女に対して、カウンセラーはどうあるべきか。それを考えている。

彼女がカウンセリングに来ている以上、建設的な方向へとパーソナリティを変化させて欲しいものではあるが、さて。

どうした態度であるべきなのだろう。どうしたら彼女と共感し、彼女と共に歩むことができるのだろうか。

少なくとも、期待は最小限であるべきなのはカウンセリングの原則だ。

“改善してください”、では駄目なのだ。“ゆっくり歩んでいきましょう”、という態度が大切なのだが。

それは分かっている。だが、これでいいのか、と思うのだ。

カウンセラーは彼女の言うとおり、鏡であるべきなのだ。自分というものを見つめ、自己の再発見を促す鏡であるべきだ。

だが、それだけでは足りない。彼女は既に、自分と言うものを十分すぎるほど見つめようとしている。足りないのは何か。

何か、アプローチが足りない気がするのだ。彼女は、口では否定するだろうが、アプローチを求めているように思うのだ。

しばらく、カウンセラーの手が止まる。ぼんやりし、そばを歩く妖精さんをただ見つめる。

妖精さんを見るのも久しぶりだ。ここも鎮守府とはいえ、妖精さんは中々見ない存在であるのだ。

資料では見たが、本当に人形みたいだな、と思った。

とりあえず今、分かっていることを整理してみる。

例えばだが、類型論で彼女を分類してみてもどうだろうか。彼女はこうこうなタイプの人間なのだ、と分類するのだ。類型論は人間が持つ個性というものを薄めてしまう危険性があるが、それでも人を分析するには役に立つ。とりあえずやってみよう。

彼女は、人間としても、艦娘としても異端であるのだ。

まず人間として、彼女は極端に内向的な人間で、しかも極端にニヒリストだ。簡単に、そして雑に言ってしまうえば狂人だろう。彼女は世間の常識に囚われず、確固たる深淵を

持っている。

いや、これは間違いだ。世間の常識に囚われるが故、確固たる深淵を持っているのだ。どうも彼女は、世間の常識がいかに無意味で残酷であるのかを知っているながら、それでも支持している節がある。

ニヒリズムはどうも難しい。

続いて艦娘としての彼女について、彼女は艦娘を疑う艦娘だ。彼女ほど、艦娘とは何か、と問うてくる艦娘は恐らくいないだろう。

戦闘美少女というものは、基本的に自らの存在について、戦う理由について疑問を持つていないものである。

だが、彼女は違う。彼女はかなり深い所まで艦娘とは何か、ということを知っている。彼女は極端なまでにメタ視点を持つとうとしていたのだ。

ここで重要なのは、彼女は戦闘美少女というものを理解した上で、それになることを望んだということだろうか。

夢だったのだろうか？ 理解は未だできていない。

何故、そこまでメタであることを望んでいるのか。そんなにメタであるのは、逆に気色悪がれないだろうか。そこは大きな疑問の一つである。

あと一つ、気になることは、普段、彼女がどのような目で見られているか、というこ

とである。

代替の予想はつくのだが。彼女は極端に外見というものを気にしている。そんな人間がどんなふうに見られているのか。

彼女から見出せることは多い。人間はそれだけ、多様性を含んでいるのだと思う。

そうして、準備を整えて、今日もカウンセリングが始まる。

話の中で、こんな話になった。

「ねえ。先生、ある日突然、美男美女になったとして、それで、幸せな人生を送れると思う？」

話題を変えようとしているのはわかるのだが、艦娘に関わる話だろうか。

「どうしたのですか。いや、まあ、送れるのでしょうかねとは、私も思っていますが」

「まあ、経験談よ。結果から言うと、難しい、としか言いようがないのよ」

「まあ、よく言われますね」

外面というのもその人の人生の一部なのだ。それが突然変わるといえるのは、それによる不自由が生まれて当然だと思っただけだ。

「人は外見が九割って言うでしょ？ でも別にこれって、ただ外面がいいから、っていう訳じゃないのね」

外面の大切さも分かるは分かるのだ。

そもそも、艦娘は外面が良いのだから良い印象を抱かれることが多いらしい。

外面の良さを嫌う人もいるのだが。まあ、少数派であるのだし、それはそうとしか。

「一番大切なのは、中身つてことですか？」

「半分は正解ね。外見つて、礼儀作法とか、人との接し方とか、そういう所にも外見は表れるつてこと」

礼儀作法等は、中身にあたるのではなからうか。外見と言えなくもないのだが。

「うーん。表現するのが難しいわね。ともかく、美男美女であり続けているつてのは大変なのよ。美男は美男の作法を知っている、美女は美女の作法を知っている、だから美男で、美女なのよ」

「はあ」

言いたいことはつまり、美人は美人であることを知っている、ということだろうか。

「それでも、美は追い求めたくなるものね。そんな作品つてあるでしょ？ ある日突然、という展開の作品が。映画だったら、あれよ、ナツティープロフェッサーつてあったでしよ。あれが近いかしら」

「また、懐かしいものを持ってきましたね」

確か、デブの生物学教授が、デブであることを馬鹿にされて、やせ薬を作つて飲む話

だったと思う。

薬を飲んだ教授は、痩せてイケメン（？）になり、といったストーリーが続く。ダイエツトを皮肉る話であつたと思うが。

「美男であるだけで、あるいは美女であるだけで人生が上手くいくのなら。どんなにいいのかしらね」

そういう話は、多い。

それで上手くないかな作品もそれなりには多いのだが。ナツティープロフェツサーも上手くないかない方の話だった。

しかし、映画に出てくる俳優は美男美女が多いことを鑑みるに、それでも結局美男美女を追い求めるのは、人のサガなのだろう。

「外見だけ、美男美女になることは。まあ、そんなに難しくないので。整形手術だつてある訳だし、あれも、一発で、とはいかないで、何回か繰り返し行う必要があるそうだけ」

叢雲は小さく、ため息をついた。

「二人前のレディーを目指すなんて、結構とんでもない話よね。暁つて艦娘が横須賀にいるけど、彼女は分かっているのかしら。なるのは簡単、でも成り続けるのはとても大変。夢なんてこんなのかよね」

人は悩む生き物だ。どんなに夢を叶えても、ああしたい、こうしたいといった欲は尽きないだろう。彼女はわかつてなかったのだろうか。

わかつてなくても、当然ではあるのだろうか。彼女もまだ、若いという証拠だろう。彼女は老けたような発言が多いが、まだまだこれからだろう。

「でも、夢はいいものだわ。私も夢を見たい」

「夢を、ですか。今からでも、遅くはないのでは？」

幾つになっても、夢は追いかけるチャンスがある。

古臭い言い回しだが、本人の言うとおり、夢を見るのは悪くない。

夢を見るのは活力が湧いてくる。

「正直、分からない。どんな夢を見たらいいのか。分からない」

叢雲は首をふる。

「どうしていいのか。どんな夢を見たら、皆が喜んでくれるのか。皆にけなされなくて済むのか。今は、よく分からない。とてもじゃないけど。夢なんか見られない」

夢を見るのに、他人の眼を気にする必要はないのだが。

さて、困ったものだ。これでは、どん詰まりだ。

なんとかできない物か。

「叢雲さんは、悲観的な人間だと思うのですよ」

「悪い？ 本当の自分がこんなので」  
叢雲は俯く。

「人間に、良いも悪いもないでしょう」

「でも、社会は区別するでしょ？」

「ですが、本質的に、ですよ」

彼女は人間に対して悲観的だ。

それは己に対して、あるいは他人に対して。

「だから、どうか、とも思うのです」

誰かに頼ろう、という発想もないのかもしれない。

あるいは、頼りたくても頼れないのかもしれない。

「私は、貴女に、人生は生きるだけの価値があるのだと、思っただけなんです」

どうやったたら、彼女は氣を楽に生きることができるところだろう。

「私はそう、思わずにはいられません。それだけは伝えたいのですが」

彼女の人生に対する絶望は、晴らすことができないだろうか。

「別に、私は、人生に、生きる価値がないのだとは思っていない」

叢雲は、カウンセラーの眼を恐る恐る見ている。

「私だけの価値を見出そうと。自分を殺すために生きようとしたのが、この自分の、私の



人生でも、あるのだから」

「自殺するために生きる、ですか」

「駄目？」

勿論、人は生まれ育ち、何れ死ぬ定めである。

のだが、死ぬために生きる意味が分からない。

「生きることは、素晴らしい。じゃあ、同様に死ぬことも、同様に素晴らしいはずじゃないかしら」

叢雲は視線を下げる。

「そう思うのは、ただ。誰かが、悪いという訳でもない。ただ、ただ。生きる、というのは、自分にとって、そうとしか思えなかったのだから」

叢雲は頭を軽くかき混ぜる。

「どこから始めたものかしら」

しばらく、叢雲は沈黙し、思想する。

「結局は、私が艦娘になる前のことを話さなければならぬのか」

そうして、ため息をつき、

「私は、生まれた時から、馬鹿だったんだ」

叢雲はぼつぼつと語り始めた。

「それで、よく、皆から笑われていたんだ。いっつも私は笑ひ者。勝手にクラスで面白い奴にされた。親たちですら私を笑っていたんだ」

ハハハと棒読みで笑うが、顔は笑っていない。

「はつきり言つて辛かったよ。なんで笑われなきやいけないんだらうつて。笑つて欲しくないつて、ずつと思つてた。それなのに、私が笑うなという度に皆、面白がるんだ」

カウンセラーにも、頭の中にありありと映し出される。笑っている皆の中で、一人困惑する少年の姿が。

「あれは辛かったなあ。冗談で、皆、私をからかうのだから。私のリアクションを求めて、ね。殴る真似をして、寸止めして。自分が大げさに反応して、彼らはこういうんだ。冗談だつて」

彼女の言う冗談が、今になって理解できる気がした。

「私がこう聞いても。『どうしたら笑われないでいられるのだらう』。そう親に聞いても、いっつもこうだ。『笑われても、無視していなさい。笑つていなさい』つて」

彼女はやはり、コメディアンで、パリアツチであつたのだと。

「私はひどく、寂しかったよ」

叢雲は、頭を机に着け、伏した。

「だから、皆が、頭のいい人が羨ましかったんだ。私も、皆と同じように笑つていたいと

思っていた」

そこで、カウンセラーは少し疑問に思う。

「皆が、頭がいいと？ 話を聞く限り、彼らを頭がいい、というには過大評価ではありませんか？」

「そうかもしれない」

自分や他人と言う人間を客観的に見ようとすると、彼女の方がまともな人間のように思えるのだが。

「まあ、こういう話はあるだろう。もし、自分がとてつもなく、“まとも”だったとしても、周りが馬鹿ばかりだとしたら」

叢雲は伏した状態から少し顔を上げ、上目でカウンセラーを見る。

「誰が、その人の“まとも”を証明するのかわたして話だよ」

カウンセラーは沈黙する。

「だから、頭がいい人になりたいと思った。皆の中に入って、尊敬されたいと思っていた。だから、いろんなことを学んだんだ」

彼女にも、それをどうにかしようとする時期があったのだろう。

「私は才能というものがなかったけど、学ぶ環境はあったんだ。私の家は、裕福で。親

も、そこそこ良く出来た人間だったんだ。私を笑ってはいたけど、私を愛してくれたんだ。辛いことがあつたら慰めてくれたし、身を案じてくれた」

自分で現状を変えようと、笑われない方法を模索しようと努力したのだろう。

「私は勉強を頑張った。それなりに大成して、いろんなことを学んで賢くなつた自信はあるよ。良い大学に行けて、親も喜んだ。専門的な話は辛いけど、色んな話をそこそこ話せると思う。賢いことで、皆と一緒に居られると思つていた。そう勘違いしていたんだ」

彼女の妙なプライドの高さというか、雰囲気は、それから来るものだろうか。

「ある日、私が笑つているときに、皆が笑つていないことに気付いたんだ」

それは当たり前前の気づきだった。

「ひどく不思議だつたよ。私は皆を笑つているのに、皆は笑つていなかったんだ。その癖、皆、私を見て笑うんだ。変な話だと思わない？」

カウンセラーも変な話だとは思ふ。

笑つていたのでから、そのことを笑われても可笑しくはないのだ。

可笑しくはないだけで変な話かもしれない。

「その時は、不思議だとは思つていたけど、わからなかった。しかし、ある時、私は気づいたんだ。私は普通の感性を持つていないのだと。それを皆が笑つているのだと」

群衆というのは残酷である。愚かで、嗜虐的で、残酷である。

彼女は、群衆の残酷さを知って、恐れているのだ。

「私もお笑いは好きだったし、コメディアンのように、なりたいたいと思っていただけ、お笑い芸人のように扱われたい、とは、思ってたなかったのに」

コメディアンとお笑い芸人がどう違うのかは、カウンセラーには理解しにくい、こうだろうかと思像できる。

彼女は、いわば、いじられキャラなのだ。

「決定的だったのは、親の一言だったよ」

叢雲は何かを必死でこらえている。

「私の親が、アスペルガーだったことを告白したんだ。そして、自分もそうらしい、と病院に行って分かったんだ」

アスペルガー症候群。興味やコミュニケーションの特異性を示す障害。

明らかに普通とは違う、特異なハンデ。

「自分は、永遠に普通になれないのだと、知って。正直、絶望したよ」

叢雲は静かに、涙をこぼした。

「だけど、絶望してなお、自分は未だ、普通になることに固執している。私が普通であるために、私は自分を殺すしかないのだと。それが、自分の生きる意味であるの」

カウンセラーには、自分殺しを勧めることはできないでいる。

救う者であるというより、社会の一員として、自殺を推奨できないのだ。それでも、理解はできる。自分を殺したいという希望が伝わってくる。

しかし、謎は深まるばかりだ。

なぜ、そこまでして彼女は、自分殺しに失敗しているのか。

そこは、理解できれなかった。

## 8. 橋大工

ある日、カウンセセラーは提督と呼ばれる人間に会う機会があった。

普段、カウンセセラーは提督と話す機会がないのだが。

呉の提督は、心の専門家であるカウンセセラーを信用していない、というより、どう接しているのかわからないようである。

まあ、こちらとしても、変に口出しをして、機嫌を損ねられるのは困るのであって。下手に接触を取ろうとせず、実績で有効性を示そうと、今まで慎重な態度をとってきたのだが。

あとは、どうも本部たる横須賀と呉の提督は、複雑な関係があるのだというが。なんというか、仲があまり良くないらしい。

カウンセセラーも本来は横須賀の所属、ということになっている。

艦娘のカウンセセラーの仕事も、横須賀の提督とのコネで手に入れたのだ、呉の提督とは初回にあいさつを交わしてそれつきりだった。

そういう訳で、カウンセセラーも上からの刺客か何か、と思われているのかもしれない。かかった。

まあそんな訳で面倒な関係があるため敬遠し、カウンセラーと提督は接触する機会がなかったのだ。

どちらも艦娘とかかわる職業であるので接点はあるはずなのだが、その接点が今まで生かされることはなかったのだ。

そう、今までは。

話す機会があつたのは、叢雲について、提督が訪ねてきたからだ。

「先生から見て、アイツはどうですかね」

呉の提督は一見粗雑だが、悪くない人間であつたとカウンセラーは感じている。

「難しいですね。彼女の問題を簡単に解決、とはいかないでしょうね」

「そうか。何を悩んでいるのか知らんが、アイツはそんなに悩んでいるのか」

軍人としての彼は評せないが、仲間思いであり、ある程度成熟した人間であると感じたのだ。

「アイツは、俺や他の艦娘に心を開かないからな。先生には、どうなんですかね」

「色々と話してくれましたよ。内容については、規則ですので口外できませんか」

散々な自虐ネタを披露してくれました、とはとても言えない。彼女が大事にしているであろう、なけなしの誇りやら信頼やらが傷つくだろう。

「そうか。先生には、色々と話しているのか。大事なことをもつと俺や、他の艦娘を頼つ



てほしいんだがな。アイツは、気取つてんのか、見下しているのか。まあ多分、俺らに気を使つてんだよな」

日常から彼女は、溜めこんでいることを想像できる。

「俺も問題児は多く見てきたが、アイツは一定の距離をとつて近づいて来るから、分からん。普通は、他の連中は、もっと俺を頼るのだがね」

それは、カウンセラーも感じた。他に見る艦娘は、この提督のことを信用し、信頼しているようだったのだ。

「アイツは変わっているが、いいヤツだからな。あんまりため込んで欲しくないんだが」  
提督から見ても、彼女は変わつて見えるそうだ。とはいえ、普段の彼女を見ている提督の認識は、カウンセラーの知る彼女の奇怪さの認識とはまた違うのだろうか。

「横須賀の、兼正提督は間違いなく知ってるはずなんだが」  
ぼそりと提督はつぶやいた。

「俺も、心理学を学んだ方が良いのかね」

「どうでしょう。生兵法だと、見くびられそうですけど」  
「なるほど、こりゃあ難しいな」

この提督に近づかなかつたのは食わず嫌いだつたのかもしれない。ただ、やはりと言うか、確かにカウンセラーの知る兼正提督とは、相性が悪そうであつたが。

「まあ、お互い、頑張っているこうや」

そんな訳で、それなりに有意義な交流ができたと思う。

ある程度、彼女の人間関係というものを聞けて、把握できたのは嬉しい。他の艦娘や提督と、寄って近づかず、といった関係を築いているようだ。

ふと思うが、彼女に気を許せる友人というのはいるのであるだろうか。

叢雲は他の艦娘と行事に参加したり、ゲームをしたりはするそうだが、これといって仲が良い友人はいないそうだ。彼女と同じ吹雪型がせいぜいそれなり、といった所だそう。

どうやら一匹狼を気取っている、らしい。

しかし、友人がいない、というのは中々にさびしいものである。何と言うか、響きの。キヤラ的にはおもしろいだろうが、心理的には良くない。孤独は人を容易く殺すのだ。

まあ、仮に彼女がそうだとしても、カウンセラー自身は、彼女の友達を名乗ろうかと思っっている。

あれだけ、暴露してくれたのだ。友達を名乗ってもよからうよ。

大事なのは、心理的に近寄れる人がいることだと思っっている。何も、私たちズツ友だよ”と言えるような関係が友達ではないのだ。

お互いの立場は関係ない。一緒にいてそれで救われるような関係、それが人生において理想的な友人関係というものではなからうか。

そんな感じのことを思いながら、今日もカウンセリングは始まる。

「今日は、ですね。私の方から希望があるのですよ」

叢雲は、じつとこちらを見ている。

「叢雲さん」

「何よ」

今日のカウンセラーは、聞くに徹するのではなく、攻めてみようと思うのだ。

「人は、信じられませんか？」

「信じたいのだけどね」

叢雲は少し目をそらす。

「あの文明人どもは、いつか裏切るわ。私たちの信用が固くとも、私たちが捨てる時が必ず来る。その恐怖が分からないとでも？」

「苦しんでいる、ということとは伝わってきます」

彼女の恐怖を、カウンセラーが全てを理解することはできない。

分かるのは、彼女が本気で苦しんでいる、ということだけなのかもしれない。

「ですが、私たちは、もっと、分かり合えるのだと思うのですよ」

沈黙が少し、流れる。

「そうかしら」

納得はしていないようだが、話はできそうだな。

「ですから、とっかかりとして、映画の話をしませんか？」

何やら、叢雲は考えている。

「映画か。ウオッチメンの映画は、私は見てないしな」

「意外ですね。観てないのですか」

好きだと、主張していたので、カウンセラーは観ているのかと思ったのだが。

「私としては、あの漫画で満足してしまったからなあ。二次創作とかもそうだけど、あれを超えることって想像できないのよ」

なるほど。そういうことか。その作品の価値を重んじすぎて、それ以降の作品を評価できなくなる、というのはあることだろう。

「だから、映画の方は、あまり期待していないわね。出来は良くも悪くもないらしいし」「偉大すぎる作品というのも、考え物でしょうか」

「玩具にするなら、軽い方が安全でしょうね」

叢雲は、ふんと鼻をならす。

「そうだな。じゃあ、ダークナイトは、観た？ バットマンの映画の」

「ええ。観ました」

ウオッチメンと同じ会社の、アメコミ原作の映画である。

「あれは、良かったわね。正統派のヒーローものっていうのは、ああいうので良いと思うわ」

「ですね」

勸善懲惡に近いヒーローもので、単純ではない深みがある作品だったと思う。

「そういえば、あの作品にはジョーカーという悪役がいましたが、どう思いました？」

「ああ、彼も冗談屋だったわね」

映画では、ジョーカーという悪役が描かれていた。趣味の悪い色合いの服と髪で、白塗りの顔に笑顔のような傷を口に持つ人物。単なる小悪党とは違う、世間やヒーローを引つ掻き回して遊ぶ。その姿は正に、ジョーカーであった。

「いいんじゃない？ 私は、好きよ。ああいうセンスのは」

コメディアンを好き、といていた彼女であったが、ジョーカーもまたお気に召したようであった。

「まあ、評するなら、悪役らしい悪よね。かなり作りこまれているから、不快には思わないわ」

カウンセラーもそう思う。あれは役者の、良い演技であったと思っている。

「バットマンと彼は、お似合いね。殺すことのできない英雄には、丁度良い好敵手でしょうね。トムとジェリーみたいに、周りに迷惑かけながら、いつまでも喧嘩してればいいと思うわ」

やけに、辛辣なように思えるが。評価しているのだろうか。

「彼のジョークは。そうですね。何と言うか」

「ん。まあ、普通、狂人のジョークは観るに堪えないと思うけど」

叢雲はやけに真剣そうな顔をする。

「私は笑えたわ。冗談に生きるというのは、やはりいいものね」

あの作品も冗談だったのだろうか？ カウンセラーにはちよつと違う気もするのだが。バットマンは普通に、正統派のヒーローものではなからうか。

「やつぱり、ナツティーフロフェツサーもそうですね。ブラックジョークみたいな作品が好きなのですかね」

「うーん。一概にはそうは言えないのだけど」

ブラックジョーク、つまり皮肉が好きだと見ているのだが。

「心揺さぶれるような作品が好きなのよ」

「心揺さぶれるような、ですか」

そこで、叢雲は大げさに、身振り手振りをする。

「例えば、コメディイーといっても、普通はマスクとか、ホームアローンとかみたいなのを想像するのじゃないのかしら」

「まあ、そうですね」

マスクもホームアローンも、名作コメディイーだろう。続編も作られ、それなりに有名だ。

「良い作品っていったら。アクションでいう、マッドマックスだとか、スターウォーズになるかしら」

「この二つの作品も有名だ。コメディではないので話からはそれるが、続編も作られ続ける名作に違いない。」

「そういうのって、楽しいとは思うけど、その程度なのよね」

「はあ」

叢雲は大げさに肩をすくめる。

「私が求めているのは、そう、心の変化なのよ。最近の作品だったら、君の名は、だったり、シン・ゴジラだったりするのよ」

心の変化か。心、揺さぶれるような作品だろう。が、しかし。

「シン・ゴジラがそこで出てくるのは分からないのですが」

「え？ 心に響かないの？ ゴジラが来ているのに、会議ばかりしているシーンが、す

ごく日本的で。私は心に響いたのだけど」

叢雲の眼が泳ぐ。

「ともかく、そういうのが私は欲しいの。性質の悪い冗談も素敵だけど、心温まる、というのも、悪くはないわね」

カウンセラーは考える。

彼女が求めているのはスリルではなく、深い人間性なのだろうか。

「では、ブラック・スワンという映画はどうでしょう？」

「何それ」

「ここで、ある有名な映画を挙げる。

「バレエの話ですね。純真なバレリーナが、悪役を演じようとして、悪徳を知り。その役に飲まれてしまう、という話ですよ」

バレエを知らなくても楽しめて、サイコホラー染みた心の奥深さのある作品だ。

「心温まる、とは違いますが。心理学的に、中々興味深い話だったので」

叢雲は首に手を当て、考えるそぶりを見せる。

「なんだか暗そうね。大丈夫かしら」

「暗いのは、駄目ですか？」

人の心を描いた良作なのだが。



カウンセラーが思うに、案外、彼女は怖がりだったりするのだろうか。

いや、まあ見るに、多分そうなのだろうか。

「どうなのだろう。ちよつと。妄想代理人っていう作品を思い出して」

「どんな作品ですか？」

「映画じゃなくて、長編アニメなんだけど。日本人の陰湿さを書いていただけ。あまりにも、生々しいというか。あまりにも陰鬱すぎて、途中で見るのを止めてしまったのよ。同監督のパプリカと千年女優が良かったから観ただけ」

カウンセラーは頷く。

「あまりにも暗すぎるのも問題ですね。フランスの歌に、暗い日曜日という作品があるので、非常に重たく、あまりにも闇が深く、多数の自殺者を出したと言われてます」

叢雲はあいまいに、ゆっくりと頷いた。

「私も、人の心を見たいけど。暗い部分を見るのが好き、って訳ではないのさ」

しばし、沈黙が流れる。

「意外と、映画、好きなんですね」

叢雲はそつぽを向いた。

「まあ、嗜む程度よ」

彼女からは教養を感じられる。

色々なものを学び、観てきたという裏付けからなる教養が見て取れる。

「ただ。どうしても、好きだとは言えないわね」

「それは。どうしてですか」

叢雲は俯く。

「ゲームが好き、って言えない理由もそうだけど。現実の世界に戻ってくるのが辛いよ」

すると、叢雲は顔を上げる。

「素晴らしい作品は、私たちを異世界へと連れてってくれるのよ。銀河鉄道の夜は知ってるでしょ?」

「まあ、ええ」

「異世界へと旅発つのは、とても、素敵なことだわ」

それは、宮沢賢治の未完の童話だ。かなり、宗教的で、哲学的な作品である。

「主人公は、いじめられていて、寂しく、辛い生活を送っていた」

ジョバンニはザネリにいじめられ、親友とも距離があり、孤独であった。

「するとある日、銀河鉄道に乗ることになり、異世界へと旅立つ」

突然、星空を眺め、銀河鉄道への旅へと、友人カムパネルラと共に行く。

「そこで見たのは。美しき風景、素敵な人たち。彼はそこで幸福な時間を過ごすのよ」  
化石の発掘所、鳥捕る人、死んだ兄弟たち。

「でも、楽しい時間はあつという間」

降りゆく人々。そして、夢の中での、カムパネルラとの別れ。

「夢を見ていたことに気づき、ジョパンニは現実に戻ると、唯一の友人が死んでいた」

カムパネルラは川で溺れたザネリを助けるため、行方不明になっていた。

「この構図は残酷ね、幻想が素晴らしい程、現実には辛いのよ」

深く、叢雲は俯いた。

「銀河鉄道の夜の解釈は概ねその通りでしょう」

カウンセラーは何度も頷く。

「しかし、その話はもう少し、補足せねばなりません」

彼女の解釈は、少々足りないのだ。

「異世界へと旅発つのは、現実へと帰ってくるためなのですよ」

肝要なのは、ここなのだ。

「幻想を通して、新しい現実を見出すために、我々は異世界へと旅立つのです」

幻想を通り抜けた後、現実へと戻ってくるのは不幸ではないのだ。

そこから、新しい現実が、生きるための新しい人生が始まるのだ。

「私はそのために、映画を見るのです」

叢雲は天を仰ぎ、口を開いた。

「そう」

心ここにあらずといった様子で、ぼんやりとつぶやいた。

「自分も、現実を見れるようになりたい」

納得はしたのか、カウンセラーは分からない。でも、それでいいのだ。

「見れますよ。いつか、きつと」

カウンセラーは、いつか、そのときが来るのを待っている。

その時が来るまで、辛抱強く待つつもりであるのだ。

## 9. 救済の技法

ただ、ただ、カウンセラーは叢雲を看続ける、いつまでも、こんな日が続くのだろうと、なんとなくそう思っていたのだが。どうやら、それは違うらしかった。

ある日突然始まった日常は、ある日突然終わるのだ。

さて、カウンセラーには、どうやったら人が、そして彼女が救われるのか、分からないでいる。

ただ、彼は艦娘がそれで救われると信じて、艦娘にも人の教えが適応されると信じて、ロジャーズの教えを守っているだけだ。

ロジャーズの教えの中には、こんなのがある。

カウンセリングの中で目指すことになる望ましい人間性とは、症状の重さの度合いや能力の有無とは、別の次元で現れる、らしい。

つまりは、ひどい精神疾患を抱えていても、身動きできないほどの能力の欠損が観られても、人間性は急速に回復することもあるということだ。

望ましい人間が現れる条件とは。それが何なのか、彼は未だ知らない。

言葉では知っているが、本質を理解した訳ではない。  
つまりは、何が言いたいかと言うと、彼もまだ若いということだ。

「カウンセリングを、やめようかと思っている」

来て早々、叢雲はそう言った。

顔は決意に満ちている。

「それはどうしてでしょう」

叢雲はそれを聞いて、嫌な顔を作る。

「最初にも言ったでしょ。こんなところに居たくないって」

こう言う所は、中々変わらない物なのだろう。

カウンセラーは内心、ため息をついた。

「私ともっと、話するのは駄目ですかね」

カウンセリングは悪ではないのだ。

心が傷ついた者には、カウンセリングが必要であると、カウンセラーはそう信じている。

「この場合は、成長の場でもあるのです。叢雲さんが語ることで、叢雲さんの成長を促すことを、私は期待しているのですよ」

「成長なんか、欲しくないし」

叢雲はそっぽを向いたが、何かに気づいたらしく、恥ずかしそうにしている。

「ハハ。子供みたいね」

棒読みで、軽く笑う。

「ともかく、私は」

叢雲は、口を開け閉めし、何かを言おうとしているが、言葉が見つからない。

「私は、叢雲さんと話ができて、嬉しいのですけどね。こうやって、深い話ができる人は、中々いませんから」

カウンセラーは決して、他の艦娘との関係を軽く見ている訳ではないが、彼女は、こことさらに重いのは事実なのだ。

カウンセラーにとって、心をくすぐる艦娘が、目の前の艦娘なのだ。

「私も、先生と話をするのは、嬉しいわ」

叢雲は、俯きながら、そうこぼす。

「でも、私は、現実に。帰らなければならないのよ。自分は、現実にしか、生きられないから」

窓の方を向き、水平線を見つめる。

「戦場が、地獄が私を呼んでいるのよ」

カウンセラーは少し、考える。

「私は、叢雲さんの意思を否定しません」

じつと、彼女の眼を見つめ、彼女が見つめ返すのを待つ。

これまででも、やってきたことだ。

「ですが、もう少しだけ、その理由を聞かせてもらえませんか」

彼女は沈黙し、時計の針が進む。

「そうね。じゃあ、あとちよつとだけ、話をしましょう」

どうやら、まだ語ってくれるらしい。

ありがたいと思うが、これが最後のだろうか？

「私の、理由を言うけど。少し、自分の作品について話をしようかしらね」

「作品、ですか」

「終わりだし、最初と同じようなことを話すのが良いでしょうよ」

彼女の作品。彼女の作品は確か。

「だから、言ったと思うけど、つまりはこの世界のことよ」

そう、この世界こそが、彼女の作品であるのだ。

「私はランプの魔人に会い、世界を変える権利を手に入れた。そこに自分は、自分だけの作品を描いた」



ありえないことだが、ランプの魔人は、どんな願いをも、叶えてくれる存在なのだと  
いう。

最初は疑ってきたが、今はそうだと信じられる。

世の中には私たちの知らない、不思議なことが沢山あるのだと。

「だけど、実のところ、自分は、こうした世界を作りたい、という考えがなかった。こ  
うだったらいいのに、世界はこうであるべきだ、と思えなかった」

思い描かないその理由を、カウンセラーは聞いている。

「どんな世界を作ったとしても、誰かに否定されるから、でしたっけ」  
「そう。そうして作った世界がこの世界だけ」

叢雲は俯きながら、話し続ける。

「何故、この世界なのか。この世界にはどのような意味があるのか。それは私にも、わか  
らない。そして、自分も知りたいと思っている」

そこで、カウンセラーは疑問をはさむ。

「前に言っていた、冗談ではなかったのですか？」

「冗談ではあるつもりだけど。ひよっとすると、冗談ではないのかもしれない」

冗談では、あるが、冗談ではない？」

「どうも、自分の欲望が多少反映されているところが、少なからずあるみたいだから。そ

れを冗談というのは、ちよつと、自身が無くなつてきている」

「どうでしょう、ね」

彼女の冗談は、ニヒリズムであり、強烈な皮肉であるはずだ。

冗談ではない、とは、彼女にとって何か価値のあることが、この世界にあつた、ということだろうか。

あるいは、こうして語つていく内に気づき、彼女の冗談に、修正が必要になつたのかもしれない。

「例えば、自分は重度のアトピーだったのだけど。艦娘になつたことでさっぱり治つたのよ」

「アトピーだったのですか」

アトピー。正式には、アトピー性皮膚炎。

皮膚というものは異物の侵入を防ぐ、バリアの機能があるのだが、アトピーの人はその機能が弱いのだ。

強いかゆみを引き起こし、重度の人は、全身が掻き傷だらけであつたりする。

カウンセラーのかつての恋人が、そうであつたのを覚えている。

「どうも艦娘になることで、身体の障害がある程度、解消されるみたいね」

叢雲は腕をまくつて、そのきれいな肌を見せつける。

「どうせなら、頭の方もどうかしてくれたらよかったのだけ」

視線を外しながら、ため息をついた。

「それと、私だけの一発芸があるのだけ。そうね、先生には見せていいかな」

そういうと、叢雲は深呼吸をし。

その姿がブレた。

すると、目の前に、蒼い髪と青い眼をした、幸薄そうな少女が現れた。

「ハア？」

「えっと。これが、私の一発芸なんです」

また、姿が変わり、今度は茶髪の、気弱い少女が現れる。

「自分は、今は電ですけど、ゲームの頃に、初期艦と呼ばれた艦娘になることができるのです」

またまた姿は変わり、今度は桃色の髪の、不思議な雰囲気を持った少女が現れた。

「いやー。どうしてこうなった、とでも言いますかー。謎ですぞー」

「なんだか、眩暈がしてきました」

カウンセラーは目頭を押さえた。

目の前で起きている現象が信じられず、何が起きているのかさっぱりである。

「本当にこれは、謎ね。叢雲だって改二まであるのに。私の体に、こんな機能があるメ

リットが分からないわ」

カウンセラーの目の前の誰かは、叢雲のものに戻り、いつもの偉そうつぶくした口調で語る。

「あとは、色々、それだけでは、ないのだけどね。自分が知っていた艦隊これくしょんとは、違う所もあるし、同じところもある」

そうして、叢雲は、カウンセラーの眼をはつきりと見ている。

「これだけは本当に言えるのだけど。作りたくて作った世界ではないんだよ」

自分の世界が、自分の思い通りではない、ということ伝えたいのだろうか。

「でも、こうだとは、常に思っていた。作らなければならない、と」

「作らなければならない？」

カウンセラーはそう聞き返す。

「そう。私の中に、脅迫のように、こびり付いている」

作りたいとは、思っていない。だが、作らなければならない？

理解が難しい。

「先生は、芸術の創作活動というものをしたことがあるかしら？」

創作活動。つまりは、何か、芸術的な活動だろう。

「私ですか。そうですね。音楽活動を大学まで、してましたけど。あとは、ツイッターで

「呟くことを、一時期仕事でしていましたね」

「広報活動？」

「まあ、そんな所です」

これはあまり、カウンセラーにとつていい思い出ではない。

「私の文は、いささか過剰すぎるらしく、変な人気が出てしまったんですよ。それで、仕事も降ろされてしまいました」

つまりは炎上してしまっただった。

「音楽の方も、ミュージシャンを目指してはみたものの。この仕事の方が、好きになりました」

カウンセラーはミュージシャンになることは、魅力的であると思っている。そう、今でも。

だが、ミュージシャンになるのは厳しい。売れる才能と呼べるものは、自分には無かった。辛い現状を認められず、結局は、今の道を選んだのであった。

今も、音楽自体は好きなのだが。

「創作するというのは、本当に難しいわね」

少し、叢雲の顔がこわばる。

「思いを込めて、一生懸命作った作品が、全く評価されない。思ったものとは、全然違う

作品ができる。適当に他人の真似をして作った作品が、ありえないほど評価されたりする」

芸術というものの本質は、難しい。

芸術自体は、作ろうと思えば、簡単に作れるものではあるのだが。作ろうとする心こそが、芸術となるのです。

ただ、評価されるとなると、それは別なのである。

主義主張は変わるとも、この世の中では、芸術もまた、求められている。耳触りのいいものを、観るに耐え得るものを、あるいは必要とされるものを。

それに沿った作品というのが、一般には評価されるのである。

彼にも、カウンセラーにもそれは、できなかった。

「私も、小説だったり、動画だったり、漫画だったり、音楽だったり。色々試みてみただれど。そんなことが当たり前だった」

そういった中で、挫折を繰り返してきたのだろう。

「作ることが、好きなのですか？」

「いや？ 嫌いだけど」

「え？」

いとも、あっさりと、叢雲は答えた。

「そうね。自分が小さい頃の話だけどね。ガンダムのプラモデルを買ったことがあったのよ」

「はあ」

ガンダムのプラモデルというとアレだろう。パーツの山から、完成品を作り出す作業である。

そもそもプラモデルというのは、歴史が古く、奥深い分野だと聞いているが。

「買ったはいいいけど。自分は不器用でね。完成できなかつたのさ」

まあ、難しそうだな、とはカウンセラーにも思う。

それに、子供が手を出して、あっさり完成、とはいかないと思う。

「で。どうしようもないから、作りかけのプラモデルを従兄弟にあげただけど。彼、すごく優秀な人間で、あっさり完成させてしまったのよ」

とはいえ、完成できる人は、あっさり作り上げてしまうのだろうか。

「なんか。それを見たら、馬鹿らしくなってね。あまり好きになれないのよ」

「才能みたいなものを感じたのですかね」

それを聞いた、叢雲は、深いため息をついた。

「あまり、私は才能って言葉、好きじゃないわ」

「それはどうしてです？」

何が気に入らないのだろう。

「才能って言葉を使う人は、言い訳しているのだと思ってた。何の積み重ねもなしに、自分ができる人間だと、信じていることに絶望してね」

「そうですか」

言いつつもわかる。才能は、それまでの人生の積み重ねである、どこかで聞いたことがある。最初から才能があるのではなく、それを形にするまでに、やることをやったのだと。

「そういう意味で、私は、技法の積み重ねが足りないのじゃないかな。って思ってたのだけれどね」

そこで、叢雲は自嘲した。

「でも、やっぱり、作ること自体は、作品自体は素晴らしいのよ」

少し、何か、叢雲の雰囲気が変わる。

「自分の冗談に対して、皆が、思い通りの反応を返してくれる。それって、素晴らしいことじゃないかな。妄想するだけで、恋している気分になるわ」

顔もゆるみ、ひよっとすると、笑っているのかもしれない。

「だから、自分の表現が、誰かの心を響かせる。そこに、誰かが、私の中に神を見出すのだと」



ただ、それもすぐに鳴りを潜めた。

「信じていたのだけどね」

カウンセラーにとって才能というものがあるかどうか、答えるつもりはない。

ただ、向き、不向きというものはあるのだと思っている。

それは、どうしようもなく、生まれた時から決まっているものなのだ。

例えば、生まれた環境が音楽に触れやすかったりすることで、どうしようもなく、音楽の素養というものが決まってしまうたりもすることが、その一つだと思っている。

「信じれない。のですよね」

「正直。わからない」

向いてないなら、どうするのか。

そこで、絶望しているのか、代わりのものを見つめるのか、あるいは、それでも諦めないのか。

「自分は、作ることに絶望したはずなのだ」

きつと、彼女は、諦めてはいないのだろうか。

「でも、こうして、この世界を作り上げた」

叢雲は天を仰いだ。

「そして、これからも、私の物語を作り上げるのよ」

そうして、自身に言い聞かせる。

「どこでもない、この現実でね。それが、私の生きて、死ぬ意味なのかも、しれないのだから」

そうして、椅子から立ち上がり、ここから去ろうとする。

「さようなら。先生。今までありがとう」

「待ってください」

「何よ。もう十分語ったでしょ」

カウンセラーは去る者は、追わず。

「これから、一人で、考え続けるつもりですか」

「そうよ。何か問題でも?」

だが、言うべきことがある。

「これから、辛いことがまだ、あるかもしれません」

彼女は、これから生きていてまた、死にたいと思うときがあるのだろう。

「その時は、私と一緒に考えませんか?」

「アンタ。いや、先生に、期待しろっての?」

出来れば、自身に期待してほしいのだが。

「いいえ、違います。期待するのは叢雲さん自身です」

きつとそれがいいのだろう。

「私は、未熟者です」

人間は、未熟な生き物だ。

完成させようとしても、完成がどこにあるのかすら分からない。

「ですが、叢雲さんもそうではありませんか？」

「だから何よ」

できるだけ、精一杯の笑顔を作つて、カウンセラーは語り掛ける。

「一人で考えるより、二人で考える方が、マシではありませんか？」

しばらく、叢雲はカウンセラーを見つめ、何かを考える。

「考えておく」

そう言い残すと、部屋の扉を開ける。

そこで、立ち止まり、カウンセラーの方を向いて、こう言った。

「御免なさい」

そうして、彼女は去っていった。

だが、物語はまだ、終わらない。

## 10. WORLD CELL

悩む。悩む。

カウンセラーは悩む生き物である。

出口が分からない迷宮でクライアントと共に、一緒にさまよい歩き続ける存在が、カウンセラーであると、少なくとも彼はそう思っている。

だが、クライアントがいないと、どうしようもない。

「これで、よかったのでしょうかね」

正直に言うと、叢雲のことが、不安なのだ。

彼女は、未だ、苦しみに囚われ続けているように思えて仕方がなかった。

人は生まれて、必ず幸せになる権利があるはずなのだ。

生きること、生きてもいい幸せを、一緒に見つけて欲しかったのだが。

まあ、終わってしまったことだ。くよくよしていたって、仕方がない。

他の艦娘のカウンセリングだってあるのだ。切り替えていこうとする。

そうした中、ドアのノック音が聞こえる。

はて？ この時間は予定がないはずだが。

「どうぞ？」

「失礼するよ」

それは、美少女の形をしていたが、艦娘ではなかった。

病的に白い肌、痩せすぎた体、くすんだ灰色の髪を持ち、死人のようだった。眼だけが爛々と輝き、その生を主張している。

彼女はまるで、噂に聞く深海棲艦の姫のようであった。

ただ、服装はおとなしいというか、目立つというか。チエックシャツとジーンズを着て、その上から貝紫のローブを羽織っている。魔術的であり、現世的でもある。それが彼女の正体を、謎にさせていた。

「今、大丈夫かな？」

「いいですけど。貴女は、どちら様ですか？」

落ち着いた声だ。

リスニングのCDのような、聞き取りやすい声をしている。

「私は叢雲が語る所の、ランプの魔人、と言えば分るだろうか」

カウンセラーは、それを聞いて驚くが、納得して彼女の存在を受け入れた。

「どうぞ？」

彼女はそうして、椅子に座った。

「どのようなご用件で」

きつちりと背をピンと伸ばして、姿勢良く佇んでいる。

「あの子にもう一回、コンタクトを取ろうと思つてね。こうやって、ここまで来た」  
じつと、そして、蒼い瞳が深くこちらを見つめてくる。

「どうやらあの子は、想像以上に君に気を許しているようだから、ね」

「それは、ありがたいですけど」

こうして見ると、不思議な人間だ。

叢雲は目の前の彼女をランプの魔人と評したが、カウンセラーにはそう思えるだけのものがある。

カウンセラーはこのような人間に、かつて会つたことがない。

「とりあえず、何か食べる？ 紅茶と饅頭でいいかな？ 良いのが手に入ったんだ」

彼女は、ローブの中から、ポッドを取り出し、お茶の準備を始めた。

その原理は謎だが、良い香りがする。

「いただきます」

カウンセラーは茶と菓子を口にする。

美味しい。

ここまでのを食べるのは、随分、久しぶりな気がする。

「一つ聞いても？」

「いいよ。ああ、聞きたいことは一杯あるだろう。時間の許す限り、いくらでも質問する」といふ

いい機会だ。

彼女のような存在が実在するというなら。目の前にいるというなら。

聞いてみたいことは山ほどある。

「何故彼女、いえ、彼に肩入れを？」

やはり、それが第一の謎である。

ひよつとすると、彼女であることに意味はないのかもしれないが、何故に彼女である

と、それでも聞いてみたかった。

「ふむ。そう思うだろう」

彼女はティーカップを置き、少し沈黙する。

「私は、あの子と少しばかり話をして、あの子が既に選んでいた道を、後押しただけだよ。

自分の世界を紡ぐのだ、とね」

それは、どういうことなのだろうか。

カウンセラーには分からなかった。

「その辺りは未だ、あの子も勘違いをしている。あの子は力を手に入れたが、全てを把握

するには未だ、時間が必要なようだ」

彼女はカップを持ち、紅茶を口にし、口を潤わす。

「まず私が。どういったものであるかを話そう。私の名前はフレデリカ。信じようか信じまいか。『ここ』ではない、『どこか』に住んでいる。ただの、概念として存在する人間だよ」

『ここではないどこか。概念として、存在する人間。』

『どれも、理解するに苦しい。』

『ただ、最後の言葉に反応する。』

『人間、ですか』

『そう。人の心に現れたり、こうしてこの世に現れたりすることはするが。そういった意味で、私はあの子の言うところのランプの魔人でもあるのだがね。私は人間だよ』

『ともかく、自分たちの理解を超えた人間、ということを言いたいのだろうか。』

『さて、私は普段、一人で孤独に過ごしている。そんな私の楽しみの一つが、こうやって他の人間に会うことだ』

『そうやって、フレデリカは自分を語っていく。』

『『こうやって、君のような普通の人間と会って話すのも楽しいが。特に好きな人間は、あの子のような人間だ』』



あの子、というと叢雲のことであろう。

彼女を、そして彼を特別にみているのだろう。

「あの子のような人間、つまり、自らの中に神を見出した人間のことで」

その言葉に、カウンセラーは詰まる。

「神を？」

「そう。あるいは、人として目覚めた、あるいは悟りに目覚めた、というのが分かりやすいかな」

概念としては知っている。

悟りの概念自体は、叢雲も語っていた。

ただ、彼女は、悟りから未だ遠い人間であると思っていたが。

「あの子は元から、神を見出し易い素質を持っていた。それなりに恵まれた環境と、心身のハンデ。人一倍、世界というものを身近に感じる素質がある一人であったのだ」

そう言われると、カウンセラーも多少は納得できる。

仏陀も王族出身で、体が人一倍弱かったと聞く。

悟りには、そういったことも関係するのかもしれない。

「そして、あの子が車に身を投じることになり、心身の機能をほとんど失ったとき、ついに、あの子は自らの神を感じた」

その状況が意味するのは、極限な状況に置かれた人間のこと。

「自らの中に神を見出すとき、人は私の姿を見ることになる」

それはつまり、メスナーの体験でもあるのだ。

「そうして出会った人間に、私は祝福を上げるのが好きなのさ」

そうして、フレデリカは優しく微笑んだ。

「貴女自身はこの世界に、何もしていない、と?」

「そういうことだ。神を見出した人間は、世界を自分で塗り替える力を持っている。この世界を変えたのは、あの子自身の力だ」

カウンセラーの目の前の人間は、世界を変えるだけの力を持っているのだろう。

だが、それでも。自分は何もしていないのだという。

変えたのは、彼自身であるのだと。

「それにしても、力をこういう方向に使う人間は、大変稀だが。この世界でも数回程度だったかな」

そう言つてフレデリカは辺りを見渡す。

「彼女は、本当に悟っているのでしょうか。私には、そうとは見えませんが」

「だろうな。だが、明確に神を感じている」

悟りというと、カウンセラーには、もっと、世俗離れたイメージがあるのだが。

「あの子は、自分なりの技で、自身を救おうとしているのだ」

そういわれると、叢雲の言葉を思い出す。

自分を救えるのは自分だけなのだ、と。

「だが。ただ、未だ、未熟で。見出した初期の頃。自身が力を持っている、ということだけなのだ」

それは、どういうことだろう。

突っ込んでみる。

「彼女はこうして、このような世界を作ったのでしよう」

フレデリカは頭を傾げるような素振りを見せた。

「なぜ、艦これの世界か。そして、なぜこうも歪であるのかと問われれば。私も知りたいところだ」

その言葉にカウンセラーは不思議に思う。

「分からないのですか」

「ああ。私も人間だ。それなりに万能だと自負しているが、あの子の作品は。あの子だけのものだ。あの子だけが、真に理解することができる」

てつきり、目の前の超人は、何もかもを理解しているのだと思っていた。

それはどうも、違うらしかった。

「ただ、私に分かることもある」

フレデリカは右手を上げ、人差し指で上を指す。

「神を見出しながらか、現実へと戻り、他者へと自らの言葉を紡ぐ。それは、仏陀やキリスト、幾多いくたあまた数の救済者の道だ」

仏陀やキリストも、人々に、弟子たちに自身の作品を語ってきた。

物語ることは、救済なのだ。

「世界を自らの作品として、開く」ことで、あの子は、世界の真理を伝え、自らと人間を、救おうとしているのだ」

作品には、この世の真理が込められている。

それは、世の無常であったり、神の国の到来であったりする。

「無自覚で。その技は、未だ、未熟なれど。だが、素晴らしい道だ。その道は人間と苦難に満ちている」

そして、絶対的な真理ではない最善の道を示すことで、自分と他人を救おうとしているのだ。

「なるほど。ですが、苦しすぎる道です」

少しだけはカウンセラーにも理解できた。

だが、叢雲を、悲しいと思ってしまう。

「悟っているのであれば。なぜ、このような道を彼女は選んだのでしょうか。もっと楽な道があったはずですよ」

「なぜ、か。ふむ」

誰にも自由があるはずだ。自分の意思を貫き通すという。

だが、叢雲はそれを捨てていた。

「あの子は、とある絶望を知って、理解している。それは、人生は苦行である、ということだ」

それはそうだと、カウンセラーは知っている。

だが、反論せずにはられない。

「人生は、もっと、美しいはずですよ。それを彼女にも、理解してほしいのですが」  
悟っているのであれば、それも理解できるのではないのか。

「あの子はそれを十分すぎるほどに、理解しているのだが」

相変わらずフレデリカはカウンセラーを見つめる。

ただ、その視線が険しくなる。

「あの子の好きな漫画を引用するなら、『楽観論者が言うにはな、この世界が宇宙で最高らしい。で、悲観論者がビビってるのはな、その通りだってことらしいや』とのことだ」  
つまり、奇怪なことに楽観論者と悲観論者の認識は同じ、ということだ。

彼らの考えはこの世界が最高であると認識しているのだ。

その事実にかウンセラーは戸惑うことになる。

「あの子は、確かに神を見出してはいる。ただし、自分だけが救われても意味がないのだとも知っているのだ。自分だけが救われても、他の人間も苦しんでいるままである、と」  
確かに悟ることは、人生をより良くすることに繋がるのだ。

だが、それで幸福になれるというわけではなかったのだ。

「苦しみにとらわれ続ける限り、人は周りを苦しませようとする。それを無視するには、あの子は繊細過ぎる。あの子は、皆と一緒に救わねば、救われないのだ」

もし、叢雲がそうであるのなら、救いは困難ではないのか。

「どうやったたら、私は、彼女を救えるのでしょうか」

カウンセラーは苦悩する。

どうにかして彼女の力になりたいと、思っているのだ。

「貴女は、私は、彼女を救えないのでしょうか」

フレデリカは紅茶を啜り、目を瞑った。

「実は私は、あの子に拒否されてしまったね。どうも、私は宗教臭うきいらしい」  
フレデリカはランプの魔人だ。

人を救うことは、彼女にとって、比較的容易い。

相手が普通の人であれば、ほとんどの願いを叶えることができるだろう。

「自身を凡庸化して、生きていくだけで救われる人生を送るか。それとも非凡なままに、生まれるのが早すぎた者たちの世界”へ転移して余生を送るかを提案したのだが、どっちも選ばない、ときた」

ただし、普通であればの話だ。

彼女は、そう、普通でなかった。

彼女はランプの魔人に頼ることを良しとしなかったのだ。

「奇怪なことではあるが。あの子も、どこかでどうしようもない自分自身を、愛したかったのかも知れない」

フレデリカは小さくため息をついた。

「だが、君には、あの子を救うことはできると思っている」

ランプの魔人にできないで、ただの人間が救うというのか。

カウンセラーは信じられないでいる。

「繰り返しになるが、自分自身を救えるのは、真に自分自身だけだ」

この言葉は辛い言葉だが、事実だと思っている。

カウンセリングは、その人自身が持つ人間性というものに期待しているのだ。

つまりは人間である限り、本人の問題は、本人で解決できるはずだという。

カウンセラーもそう思っている。

「だから君も、あの子の一部となるといい」

ただ、自分自身とは、何もその人ひとり、という訳ではないのだ。

「あの子の人生の中で、生きるのだ。あの子にとって、大切なものとなるように。例えば、君が死のうとも、その意思は彼女の中で生きるように、ね」

自分の思いを彼女に伝えるのだ。

つまりは、自分もまた、彼女に自分を開かなければならないのだ。

「その時を期待して、ただ、続けると良い。あの子に近づきたければ、近づくの良い。あの子の作品を理解すればするほど、それだけあの子は喜ぶだろう」

作品には、思いが込められている。

思いを理解し、寄り添えられることが出来るのなら、彼女の救済に繋がるかもしれない。

「近づくための素養も、君は十分に得てきているようだ」

「それは、精神的な意味で、ということですかね」

決して、今までの努力は無駄ではないのだろう。

それをこれからも続ける限り。

「ああ。それと、肉体的にもね。最近、自身の周りに妖精さんを見るだろう。それは、艦



娘になるサインらしいな。あと一週間のうちに、君も艦娘の仲間入りだな」

「はあ？ でも。いや、そうか、彼は」

「まあ、繰り返すが、どうやらあの子は、想像以上に君に気を許しているようだ。止めて欲しければ、あの子に言うといい。あの子ならば、それもまた良しとするだろう」

艦娘になることは、どうも彼女の理解に必要、という訳ではないらしい。

「艦娘になれば、よりあの子に近づけるだろうが。最も大切なことは別にある。君が彼女に語り続けることは、彼女の救済への道へと歩むこととなるだろう」

カウンセラーは決意を抱き、フレデリカに問う。

「最後に。聞くのは野暮かもしれませんが。私は、これから、どうすればいいでしょう？」

「それはどういう意味だろう。何を迷っているのかな」

フレデリカにとっては、十分、カウンセラーは分かっているはずだった。

「艦娘になるかもそうですけどね。私も迷っているのですよ。拒否された私が、艦娘の、そして彼女と会うことを続けていいのかと」

覚悟はほぼ、決まっている。

ならば、後押しするのみ。

「ならば、迷い続ければいい。君たちの職業はそういう仕事だろう」

「そうですか」

カウンセラーは苦笑する。

「くよくよするな、とても言われると思ったのですが」

それを聞くと、フレデリカは頷き、微笑んだ。

「その姿は。とても人間的だ。その思いこそが、善く人生を生きる道であり、人を救う道なのだ」

悩む姿は一般に敬遠されがちだ。

だが、フレデリカは悩む姿もまた、良し、と思うのだ。

悩む姿もまた、人間であると、認めていた。

「そろそろ時間だな。他の艦娘のカウンセリングもあるのだろう。私はここで失礼させてもらうよ」

彼女は、時計を見て、カウンセラーもまた、時計をつられて見ていた。

もうじき、別の艦娘が来る時間が近づいていた。

「最後になるが。あの子に伝えてやるといい。私は君を待っているよ、と。君自身の作品が、世界が人間を、そして君を真に救うときが来るのを。例えば、至るには永遠に未熟であれど。私は、君らを、温かく応援するつもりであると、ね」

上手くいくかは分からない。ひよっとしたら、上手くいかないのかもしれない。

それでも、フレデリカは、支えようと思っていた。

「その時が来るのは長い時間がかかるであろうが。続ける限り、いつか、やってくる時が来ると、私は信じている」

カウンセラーに深い、何かがこみあげてくる。

「ありがとうございます」

「うん」

良い時間だった。

このまま、もつと、話を続けてみたいと思っている。

だが、もう終わりが近づいていた。

この時間に終わりが訪れるのだ。

彼もまた、現実に戻らねばならない。

「では、君も自らの神を見出すことがあれば。また会おう」

フレデリカは扉を開き、外に出ようとすると、彼女の存在が消え始めた。

なんて事はない。彼女もまた、彼女の現実へと帰るのだ。

「その時に自らの世界を開くのならば。また、それも素晴らしいことだろう」

そうして、微笑んで、消えていく。

「その時まで、ささようなら」

そう残してフレデリカは去っていった。

そう、彼らの人生は、まだ、始まったばかりなのだった。

彼らの苦難の人生は続く。

だけど、それは不幸でも何でもないのだった。

## 救済の技法「Bonus Tracks」

## 11. BERSERK — Forces —

夢も希望もない世界で、ただ死ぬように生きている。

男は、ただひたすらに孤独であった。

男は、カミユの言う所の異邦人であった。

現実にも、<sup>ネット</sup>空想にも居場所がなく、ただフラフラと、両方の隙間とも呼べる場所を行き来していたように思える。現実では図書室や家で、あるいは運動でひっそりと時間を過ごし、ネットではただひたすらに、傍観者に徹して他人を眺めていた。

男は人との関係を取り損ね続けていた。

だが、そうしていれば、いつか、誰かがきつと、助けてくれるのだと。

何の根拠もなく信じようと頑張っていたのだった。

希望が全くない、という訳ではなかったのだが。

現実でも、<sup>ネット</sup>空想でも、そういう機会はある。

例えば学生時代なら、受験勉強だとか、部活動の大会だとか、ネットで好みの創作物

を見つけただとか。男が活躍できそうな時は、そういう機会は往々にしてあった。

だが、男が見つけた希望は、常に競争であった。誰もが希望を持ち、希望を追い求めていた。

希望を追い求めているのは男だけでなく、そして彼らは往々にして男より狡猾であったり、男より先に準備をしているのであった

結果、男の手に希望が手に入ることとは決してなかった。

手に入るのは、「三年間辞めずに頑張った」とかいった僅かなコメントであったりして、慰め程度のお零れであった。

「——ちゃん」

中二病とも言うべきか、男は自身の可能性というものを信じていたのだ。

自分が変わっているのだから特別に違いないのだと、才能に満ち溢れているのだと、普通でないことができるのだと。

だが、程なくして気づくのであった。

そんなものはないのだと。

そんなところだけ、男は普通であったのだ。

「——雲ちゃん」

認めたくなかった。

これだけ傷ついたのに、手に入るのが普通の幸せでしかないのだと。そんなものは欲しくなかった。

美味しい食べ物？

くだらないジョーク？

どこにでもいるような友達？

ああ、でも。

それが幸せだと言えるのは、幸せだろう。

でも、男はそんなものはいらないのだ。

男が欲しかったのは――

「叢雲ちゃん」

目を覚ますと、目の前には、垢抜けない黒髪的美少女がこちらを見つめていた。

ルームメイトの吹雪だ。

「今日は、休日なんだけど」

「司令官が呼んでるよ。パソコンについて話がしたいって」

「あつそ」

回らない頭を回し、言うべき言葉があつたのを思い出す。

「おはよう、吹雪」

「おはよう、叢雲ちゃん」

布団から上半身だけを起こし、首を回す。

「司令官には、準備するから時間がかかると言っておきなさい」

「準備？」

「化粧よ」

吹雪としては、その言葉に困惑する。司令官が呼んでいるのだからさっさと行った方が良いと思うのだ。

「いいの？」

「このまま会うのはあり得ないわ」

パソコンの話題となると、大したことではないだろう。

叢雲は布団から起きて、箆笥からバスタオルやら替えの下着やらをとる。

そうしてシャワーを浴びに向かった。

そこで適当にシャワーを浴びる。

ただし、髪にかけないように。髪にかけると乾かすのに時間がかかる。

そこで、朝ごはんを食べたいと、ひとりごちる。

せつかくの休日なのに、今日は気分が晴れない。

提督に呼び出されるのは、まあいい。



気に食わないのは、何か気持ちの悪い夢を見たことだ。

しかも、それを覚えていないときた。

もやもやが、晴れない。

そうして身体を綺麗にすると、部屋に戻ってスキンケアを始める。

まず、戦時下でも手に入る、素朴な化粧品を手についた。スキンケアはレディの嗜みだ。

叢雲は鏡の中の自分を見つめる。

眉はへたりこみ、目にはハイライトが消えているようであった。

覇気が無く、何かに怯えていて、まるで狼に追われた後の羊のようであった。

とてもじゃないが、叢雲とは呼べる自信がなかった。

「違う。これは私ではない」

出来るだけ理想の叢雲をイメージし、意識する。

すると、多少マシになった。

これで、若干キツイ感じの美少女に見えたら、いいのだが。

そうして、化粧品を丁寧に塗っていった。

「遅かったな」

「アンタねえ。これでも急いだのよ」

叢雲が司令室に着いたのは、ヒトマルマルマルの頃であった。

因みに起きたのがマルキュウサンマルである。

「で、パソコンの件って何よ」

尾崎提督は、書類仕事から手を放し、叢雲に向き合う。

「お前にな、パソコン教室をやってもらおう、と思ってる」

「パソコン、教室ね」

それを聞くと叢雲は理解し、渋面を作る。

叢雲にとつて、あまり楽しい作業ではなさそうだ。

そもそもが新人指導の類はあまり上手ではないと自覚していた。

何故、自分がとは思う。

とは言え、この鎮守府でパソコンが使える連中は少ない。

横須賀の方であれば、違ったのであろうが

尾崎提督はお偉いさんなので当然使える。

艦娘では元工学部であった夕張がかなり、元生物学部だったらしい長月がそこそこ。

白雪は事務仕事であれば完璧だろう。

あとは自分くらいで、他の連中は趣味で扱う程度であった。

「で、誰に教えろと言うの?」

「こないだ室井の所から来た、青葉がいるだろ。アイツに教えてほしい」

青葉か。彼女はとも、艦娘として成り切れていない艦娘であった。

自身の中にある青葉としての意識が辛いらしく、相当にいたたまれない姿を晒していたのを覚えている。

横須賀での少しの間、自分と付き合いのあつた艦娘ではあるが。

「アイツな。解体することにしたんでな」

「そう」

解体される艦娘は、艦装を外し、普通の女の子になるのだ（元に戻れるとは言つてない）。

そうした元艦娘たちのその後の人生が、よく問題とされるが、さて。

「まあ、それがいいと思うわ」

「で、身請けとして、ウチの鎮守府で面倒を見ることになったんだが。手に職を付けさせようと思つてな」

面倒を見る、といつても、いつまでになるかは分からない。

ただ、普通の生活ができれば、と、尾崎提督は考えている。

「ふーん。それでパソコンなのね」

「事務仕事に使うんで、ワードやエクセルを教えてやってくれ」

深海棲艦が現れてから、パソコンは発展し辛くなった。

パソコンの本場である、アメリカとの輸送ラインが途絶えてしまったからだ。

とはいえ、パソコンは今でも要々で、古い機種が細々と用いられている。

パソコンを教えるというのは、今でも通用するスキルだろう。

「青葉って、どの程度パソコンを使えるの？」

「そこまでは知らんな。艦娘になる前は写真屋でバイトしていたらしいから、ある程度はできるのじゃねえかね」

「そう」

何とも頼りにならないことだこと。

「期限はいつまで？」

「自由にやってくれ。気長に待つわ」

「まったく。そういうのが一番困るのだけど」

叢雲はため息をついた。

とはいえ、頼まれたからにはしっかりとやるつもりであった。

司令室から出た叢雲は、遅めの朝食を取る。

休日の艦娘の食事は、艦娘の自由に委ねられている。

今日は鳳翔がサンドイッチを作っていたので、それのお零れを貰うことにする。  
美味しい。

鳳翔の料理が食べることができるのは、叢雲が呉に来て一番嬉しかったことだ。  
早速準備に取り掛かりたい、とサンドイッチを食べながら考える。

とはいえ、何をすればいいのか分からなかったので、パソコン初心者用の本を探しに行くとする。

資料室にあっつけ。

そうして向かった先が、資料室であった。

資料室には、主に戦史関連の書籍、内部資料、ミリタリー雑誌、囲碁や将棋、麻雀の本、クロスワードやナンプレの本、後は何故かライトノベルがそろっていた。

懐かしの名作映画や、プロジェクトXのDVD全巻などもあった。

しかし、パソコンの書籍は一つもなかった。

叢雲は内心、舌打ちをする。

適当なのを買って、経費で落とさないとな。

そこで、ある人物を見かけることになる。

「あら、山城じゃない」

いつもの巫女服に、*「若女将は小学生」*なる本を手にしている。

「兄様？」

「アンタ。それ止めなさいって言ってるでしょ」

実はこの二人、艦娘となった元の人物が実の兄弟であり、まあまあ珍しい例である。

どうでもいいだろうが、彼女もパソコンは使えない艦娘である。

「だって、兄様は兄様だし」

「だってじゃないわよ。酸素魚雷をくらわせるわよ」

「兄様は変わってしまったわ」

不幸だわ、と呟く山城。

聞いちやいねえ、と苛立つ叢雲。

「まあ、いいわ。ともかく人前では、それ、止めなさいよ。扶桑がうるさいのだから」

叢雲はこめかみを抑える。

自分も変わってしまったが、何より変わったのはこの妹なのだ。

不幸不幸言う艦娘が、自分の実の妹だとは信じれなかった。

振り返り、外に出て、外出の許可を貰おうと考えたのだが。

「兄様は。家に帰らないのかしら？」

その言葉で、叢雲の足が止まる。

「ここが、私の家よ」

そう言い残すと、叢雲は逃げるように資料室を去って行った。

その後ろ姿を、山城はじつと見つめていた。

兄様は、いつになったら自分たちと向き合ってくれるのだろうか。

そう思ってた。

「どもう。お久しぶりです。元、青葉ですう」

「久しぶりね。青葉。ああ、今は何と呼べばいいのかしら」

「今は、というより元々、奈緒って名前だったので、そう呼んでください」

「そう。奈緒、ね。素敵な名前ね」

鎮守府の娯楽室の片隅には、そこそこ新しいノートパソコンが置いてある。

パソコンには、ワードやエクセルの他、サイレントハンターや鋼鉄の咆哮、提督の決断、太平洋の嵐などのゲームが入っている。

勿論、ローグライクのゲームも誰かがこっそり入れてあったりする。

ゲームに関しては、パソコン使用者がこれで増えればいいのにな、とのインストールした者の思いが込められている。

現在、それが達成できているとは言い難いのだが。

そのパソコンでパソコン教室をやろうというのだった。

叢雲は、頬杖をついている。

「じゃあ、早速、パソコンをつけてみなさい」

と、叢雲は言ったが。

奈緒は動かない。

「あの、どうすればいいのでしょうか」

「はあ？」

叢雲は頬杖を戻して、奈緒の方を向く。

「何って、電源入れなさいよ」

「御免なさい。電源ってどこですか？」

「そこからの？」

リングのボタンを押せば、パソコンの電源はつくのだが。

それを知らない人間に会うのは、随分久しぶりであった。

とはいえ、無理もないだろう。

スマホは扱えても、パソコンが扱えない人間は案外多いのである。

「御免なさい」



「謝らなくていいわよ。はあ」

今日は、本当に頭が痛い。

「てか、アンタ。学校の技術の時間で何していたのよ」

「え、と。青葉、じゃなくて、奈緒は、不登校で。技術の時間は出てなくて、

あと、ちよつと艦娘に成る前の記憶は結構曖昧で」

「ああ、そう。聞きづらいことを聞いたわね」

場に気まずい空気が流れる。

「御免なさい」

「だから、謝るなって言ったでしょ」

叢雲は頭をかき混ぜて、どうすればいいのか考える。

とはいっても、こればかりはどうしようもないだろうが。

「いいわ。私が最初から教えてあげる」

「よろしく、お願いします」

そうしたことがあって、今日も日が沈んだ。

「疲れた」

「お疲れ様。叢雲ちゃん」

叢雲は、自室で横になって、iPodのヘッドホンから流れる音楽を聴いていた。

曲は、グレン・グールドの『ゴールドベルク変奏曲』だ。

「大変だね」

「そう思うなら、吹雪もパソコン、習って教えなさいよ」

「また、叢雲ちゃんたちの負担が増えるだけじゃないかな」

それを聞いて、叢雲はしかめ面を作る。

「それもそうね」

吹雪は少女漫画の雑誌を読んでいる。

「何でもこうも、この鎮守府の艦娘はパソコンを使えないのが多いのかしらね」

「んー。そうなのかな。他の鎮守府は違うの？」

「佐世保はどうか知らないけど。横須賀は多かったわね」

叢雲は、横須賀のことを思い出す。

あの鎮守府は秩序的な良い組織だった。

まあ、今の組織は組織で楽しいのだが。

パソコンを使える人間が少ないのが、不満なのだ。

「でもまあ、パソコンが、消えてなくなるのは、それはそれでいいかもね」

「そうなの？ パソコンって便利なんだよね」

「それはそうだけど」

自分は、パソコンを浴びるほどにしてきたと自覚はある。

「良い思い出、ないのよね」

だが、楽しかったというかと言うと、そうでもない。

そうした時間は、どうしても虚無に思えて仕方がなかったのだ。

「でも、ちよつと。寂しいかな」

この世からパソコンが無くなる世界。

そこには、自分が描いていた一種の理想郷があるはずだった。

そこには、サイレンス沈黙が訪れるのだと。

「今、私は幸せなのかな」

今ここは、望んでいた幸せなのだろうか。

何故か、そうだと思えない自分がある。

「叢雲ちゃんに幸せじゃないの？」

「どうかしら、ね。私には分からないわ」

「ふーん。そうなの」

美味しい食べ物。

性質の悪いジョーク。

ここにしかない友達。

これが自身が描いていた理想であったのだろうか。

グールドの素敵な音楽を流し聴きながら、叢雲は現実から離れて考えるのであった。

12. BERSERK — Forces — (GOD  
HAND MIX)

そこは、学校であった。

小学校であり、中学校であり。高校であり、大学であった。

ひよつとすると、保育園ですらあるのかもしれない。

その玄関に、男が立っていた。

黒髪黒眼で、やや高い背と痩せ気味の体を持った男だった。

遠目から見れば容姿は良いのだが、近づいてみれば男の異常が良く分かるだろう。

頭も手も、傷だらけだった。

それが、彼の容姿を残念にしていた。

男は、土足のまま、玄関に足を踏み入れ、内部を歩き始めた。

講義室や保健室が、体育館や音楽サークル棟が、実験室や運動場がそこにあった。

当然のように、人は一人もいなかった。

そして、男の目当ての場所にたどり着いた。

そこは、職員室だった。

なぜ、ここを目指していたのか。男にも分からなかったが、ここを目指さなければならぬ気がしたのだ。

男は部屋の冊子を開けた。

中に入ると、一般担任の席の一角に人影があつた。

紫ローブの少女がノートパソコンを前にして座っていたのだ。

「誰」

男の声に反応して、少女は振り返る。

「貴女のような存在は知らない。貴女がそこに座っているのはおかしいだろう」

ファンタジー小説に出てくる幽鬼のような少女が、見つめている。男はことに萎縮していた。

しかし、頑張つて細々と、声をあげていた。

「そうだろう。こうして君と会うのは、初めてのことだからな。君と私は完全に初対面だ」

少女が丁寧に、ゆっくりと語る。

「自己紹介をしようか。私はフレデリカ。フレデリカ・マーキュリー」

「フレデリカ・マーキュリー？」

男は少女のうさん臭さに、思わず聞き返した。

「私の名前が気になるか。だが便宜上、名前は必要だろう」

男は納得した。その名前が本名、という訳でもないのだろう。

「そうだな。自分は、桐敷淳」

「そう。桐敷淳きりしきすなわ、か」

相手が名乗ったからには、自分も名乗らねばならない。

そう思つて、男は名を名乗った。

少女は、男の名を聞くと、何度か頷いた。

名前を吟味しているのだろうか？

「さて。どうして君はここにいるのだろうか。どうして私はここにいるのだろうか」

それはある意味当然の問いかけであつた。

しかし、男はその問いの答えを持っていなかった。

問いの答えは、この少女だけが知っている。

「ここは君の心の世界。君の思考が思い浮かべる夢なのだ」

「ここが夢？」

ここが夢だと知ると、男は動転した。

すると、男は突然血を吐き、体がひしゃげ始めた。

着ていた服は血にまみれ、体をくねらせていく。

「君の想像通り。現実の君は、交通事故に遭い、意識不明の重体な訳だが」  
少女は倒れた男に、そつと近寄った。

「私の声が聞こえるかな。落ち着いて。深呼吸だ」

男の吐く息は荒く、とても冷静にはなれない様子だ。

夢の中でありながら、激痛に悩まされているのかもしれない。

すると、少女はその青白い手で、男の手をとった。

「私の温かみを感じるのだ。そうして、想像するといい。傷が無い自分の姿を」

しばらく男は悶えていたが、しばらくたつと、その傷が消え始め、元の姿に戻っていった。

ここは夢の世界、意識・無意識が現実になる場所。

健全な姿を思いさえずれば、自身はいくらでも元通りになれるのだ。

そうして、男は立ち上がり、少女に礼をした。

「ありがとう」

「どういたしまして」

少女はうつすら微笑んだ。

「さて。どうして君の夢に私が現れた、ということだが。私は祝福を挙げに来たのだ」

祝福、という言葉に、男は困惑する。



「おめでとう。君は自分自身に、神を見出したのだ」

男は、目の前の少女の言っていることが、理解できないでいた。

「感じるのだよ。傷ついたその身と心に、君の中に、神の胎動を」

男は、心身の極端な損傷により、身体感覚が研ぎ澄まされ、どこにでもいるけど普段感じることの無い存在、つまり神なるものを感じたのであった。

しかし、男はそれを自覚していなかった。

「いやあ、めでたい。生まれ変わおって誕生日でおめでとうのパーティーでも開こうじゃないか。丁度良いケーキとコーヒーがあるんだ」

少女は、男が理解していないのを構わず、淡々としていた。

そして、そのローブの中から食器とチーズケーキを取りだし、お茶の準備を始めていた。

「貴女は、一体、何なんなのだろう」

男はそう溢す。

「私か？ 私は人間だよ。心の中に現れるような存在ではあるがね」

そういつて、少女はお茶の準備を続ける。

机にはもう一つの椅子が一人でに寄せられた。

その間に少女はコーヒーをカップに注いでいた。

「そう言う所がどうしても、貴女のことを人間だと思えなくて。まるで、貴女は、そう」  
「神と？ まあ、私を見てそう言う人は多いな」

少女は思わず苦笑する。

「生きてもいるし、死んでもいる。概念の存在であり、人の心の中に人として現れる。それが私たちという人間だ」

いわば、彼女はキリストや仏陀に近い存在なのだ。

既に死んだような身であるが、概念として生き続けている。

それが彼女たちであった。

「だが。神は常に、我々の心に。技の中に御業みわざとして宿るのだ」

そうして、少女は胸に手を当てる。

少女は言っているのだ、神は人の心に宿るのだと。

少女は男をしばらく見ていたのだが。

納得していないのを見て、姿勢を改めた。

「納得するのは時間がかかりそうだ。じゃあ、私の身の話でもしようか」

そこで、コーヒーを啜る。

「私の過去話をしよう。楽に聞いてくれ。そのコーヒーとチーズケーキは美味しいよ」

少女はそうやって、男に座ってお茶をするように勧めた。

男はそれに従い、コーヒーをすすり始めた。

「私は、君とは違う時空世界の、アメリカで生まれ育った」

少女はそうやって、語り始める。

「アメリカがある、といつても、君らの世界とは決定的に違う所があった。それは、私の世界の人間は、宗教に負けていたのだ」

「宗教に？」

「そうだ。数多にして新古問わず、宗教が世界各国に跋扈蹂躪していたのだ」

ある国は宗教によって墮落し支配され、ある国は宗教によって紛争の最中にあった。

「アメリカの正義は地に墮ち。開拓者たちのアメリカンドリームはその信仰を失っていた」

そうした中で少女のアメリカは、あまりに無力な存在であったのだった。

「だが、アメリカ人は、諦めていなかった。あるアメリカ人は考えた。アメリカの敵に對抗できる、アメリカ人による神を作ろうと。アメリカンドリームを再現しよう」と

少女のアメリカはもはや、世界最強の国家ではなかった。

それでも、かつての栄光を取り戻そうと、奮起した人たちがいたのだ。

そうして頼った存在が、神であった。

「そうして、D・r・マンハッタン計画が。神は実在した、しかも彼はアメリカ人だ大作

戦”が始まった」

宗教に対抗するには宗教が一番であろう。

そうした考えのもと、彼らは彼らの古き信仰対象であった、アメリカンドリームの一つ、スーパーマン神を現実に作り出そうとした。

「計画の目的は簡単だ。神を科学により作り出そう、という訳だ。遺伝子工学やら心理学等を駆使し、人間から神と呼べるような存在を作ろうという話だよ。そうした神をもつて、アメリカを立て直そうとしたのだ」

アメリカは科学によって発展してきた国家だ。

科学をもつてすれば、完全なる神を作れるのだと、彼らは信じていた。

人間を遺伝子やらなんやらするので、倫理的にはアウトだったが、彼らにそうしたことは関係なかった。

それだけ、少女のアメリカは、切羽詰っていたし、他に頼るものもなかったのだ。」「無理だろう」

「まあ、そう思うだろうな」

男が思うに人間は、不完全な生き物である。

それがどうやって、完全なる神に至ろうというのだ？

理想的な人間を作ろうとしたって、それは『ぼくが考えた理想的な処女』みたいなも

ので、実在するに耐えないのではなからうか。

そう訝しんだ。

「とはいえ、アメリカを救う程度のスーパーマンで良かったのだ。その程度なら、理論上は出来ると分かっていた。人間が想像できることは、全て実現可能であるということ、私の世界では証明されていたのだから」

少なくとも見込みはあったのだ。

衰退したアメリカとはいえ、そうした科学力を、少女のアメリカは保持していたのだ。

「ここでの最大の問題は、アメリカを立て直す神を想像することが、世界平和よりは楽だとはいえ、難解であったということだ。どういった神であれば、アメリカを救うことができるのか。我々の議論は常にそこにあった」

現実の問題は、おおよそが単純なものではなく、複雑怪奇な問題であった。

例えば、宗教団体を滅ぼそうとしても、どうやって彼らを滅ぼせばいいのだろうか。

いくら、無人機で爆弾をばら撒こうと、核ミサイルをぶつけようと、彼らは撲滅できなかったのだ。

「私はその長い計画の中で、作り出された一人だった。私を作ったコンセプトは、神を作り出す人間を作れないか、というものだった。つまり、アメリカを救う神を想像できる

人間を作ろう、という訳だった」

アメリカを救う神つてどんな姿をして、どう作ればいいのか分からない？

一気にそれを達成しようとするから駄目なのだ。

こういうときは、段階を踏んで実行しないと。

なら、それを思いつく人間なら、俺たちでも作れるんじゃない？

これも相当な無茶であり、実現には時間がかかったが。ともかく、彼女はそうして作られた。

「私は生まれた時から学問に興味を持ち。学問を学び、学問を追求し。そうした上で、いくつかの試験体を作り上げた」

少女は学問を基に、人体実験を繰り返した。

実戦投入を交えながら、そうして着々と、研究成果を積み重ねていった。

「結論から言うと一人。本当に神と呼べてしまうような存在が、出来てしまったのだ。彼女の名前はグウェン。名前の通り、とても白い身体をもった子だった」

グウェンと言うと、“白”を意味する言葉で、女性の名前として用いられる言葉である。

「女性？」

「ああ。女性だ。あの子は地母神と月の女神、そしてそれらを数学の概念で、人間として

制御しようとした人間だった。『全ての母にして奴隷。それがあの子のコンセプトだった』

その子は一つの思いつきから作られたのだ。

既存の方法では上手くいかない。何かブレイクスルーが必要だという思いから。

そんな中、ふと少女は思いついたのだった。

自分のように女性なら、未知なる可能性があるのでは、と。

既存のスーパー<sup>理的</sup>な男は、散々試してきた後だった。

のであれば、スーパー<sup>理的</sup>な女を試してみてもどうだろうか、と。

各神話がこぞって征服しようと試みた地母神の絶対性、月の持つ神秘性、数学の汎用性。

一応、機械仕掛けの神を目指してはいるが、何れか一つが良い方向に発現できれば、と  
思っていたのだが。

今後の研究に少しは役立てばいいな—程度の認識であったのだが。

「あの子は明らかに人間を超えていた。あの子は思いを、何でも現実に変える力を持っていた。本来、人間なら大なり小なり、誰しもが持っている力の、飛び切り強力なものだった」

人間は現実を変える力を持っている。

腹が減れば、食べ物を探し、腹を満たすだろう。

氷河期が来れば、適当な発明品を作り、しのごうとするだろう。

これが、人間の持つ力だ。

その神は想像できることならば、文字通りなんでもできたのだ。

無から火の玉を作ってアメリカの敵にぶついたり、テレポートしてベトナムからマンハッタンまで移動することができた。

その力はまさに、人を超えていたのであった。

「実に、興味深い研究結果だったが。未だに私はあの子を研究しているのだが。うん。あー。実戦投入はするべきではなかったな」

関係者たちは自分たちの神の姿に、非常に喜んだ。

これまで作ってきたヒーローたちとは違う、本物のスーパーヒーローが出来たのだと（厳密にはスーパーヒーロインだが）。

そうして、早速実戦に、アメリカの戦いに用いてみようという話になった。

「あの子は研究資料として、今後の発展に用いるべきだった。あの子という神が与える危険性というものを、我々は過小評価していた」

スーパーヒーローが実現したらどうなのだろう。

みんながそれを崇めて持て囃すのだろうか？



最初はそうなるのだろう。

最終的にどうなるのか、分かり切っていた。

少なくとも知の巨人である少女だけは、分かっていたのだ。

「私は理解していたのだが。私以外の人間は勘違いしていた。そう思うには、あの子は素朴で、従順すぎた。それ故に、あの子の持つ狂気に気づいていたのは私だけだった」

少女は理解していた。

どうあがこうが、どんなに都合の良い神を作ろうとしても、神は我々の手に負えない存在であるのだと。

少女だけは、とあるアメリカンブラックジョークコミックを見て理解していたのだ。た。

その姿には、哀愁が滲んでいた。

そうして少し冷めたコーヒーを啜った。

「ここで、冗談みたいな話があるのだが。あの子が神と崇められて、アメリカを救えと懇願されたとき、あの子は何をしたと思う？」

少女は頭を傾げて見せた。

男はそこで考える。

「アメリカ以外を滅ぼしたとか？」

「その通りだ」

男の答えに、少女は満足そうに頷いた。

「しかし、あの子はそれだけで満足しなかった。アメリカに滅ぼされた敵を見て、あの子は非常に苦しんだ」

突然になるが、神とは一体なんだろう。

普通は、超自然的な存在を人間の認識に落とし込んだもの、と定義するのが正しいのであろう。

人間の認識を持って言うならば、その神は優しすぎたのだった。

「あの子は暴走した。世界の全ての人を救わんと。全ての人間を滅ぼしたのだ」

男はその冗談に、少しだけ笑って見せた。

「あの子はその身をもってビッグクランチとビッグバンを起した。そうして世界は平和になったのさ」

人間が皆死んで、全ての問題が解決したのだった。

確かに世界に平和は訪れ、人は死によって救われたのであろう。

だが、その救いに、何の意味があるのだろうか？

「死による全ての救済も。万人が納得できる訳ではないのだがな」

少女のアメリカにしては、アメリカ以外を不幸にして、アメリカを幸福にしようとし

ただけであった。

別に全世界の救済なんて、望んでいなかったのだ。

しかし、少女の作った神は、そう思わなかったのだろう。

「あの子はすべての人類を救おうとした、言わば、魔王だったのだろうな。まさか、勇者を作ろうとして魔王を作ることになろうとは、ね」

そんな作品はあるだろう。

一つの方法を持つて、全ての人類を救おうとする魔王が登場する作品が。

とある魔法先生の漫画だったり、ニンジャ漫画だったり。

技法は異なれど、少女の作った神の姿は、まさにその魔王と一致していた。

「貴女は何故、生きている？」

そこで男は、当然の疑問を口にした。

死によりすべてが救われた世界から来たのに、なぜ、貴女は生きているのだと。

「私は死んでいる。だが、生きてもいる。私はあの子に導かれたのだよ」

簡単に言うると、彼女は神によって、存在を引き上げられた。

そうして、彼女は人間でありながら生きることもなく、死ぬこともない存在となった。

「そうして私は、概念としてのみ存在することになった。あの子と同じ、悠久の時を暮さねばならないのさ」

男は少女の一連の話を聞いて、こう思った。

「貴女はやっぱり神だろう」

そうとしか思えなかった。

神を作る技術、それはまさに神の御業ではなからうか。

「確かに。私の技に神は宿っている。だが、私が真に神と呼べる存在は、あの子だけなのだよ」

人には素晴らしい力があるのだろう。

だが、それでも神には程遠いのだ。

「簡単に言ってしまうえば、神はいくらでも作れる。だが、人間はどこまで行っても不完全な生き物だ。例えばどんなに昇華されようとね」

まあ、私がもう一度作る予定は永遠に未定だが、と小さく呟いた。

「貴女はその神を崇める信仰者であると？」

男は不審に思い、少女を見つめる。

「その通り。あの子を崇める弟子の一人、と聞いていいだろう」

「まさか世界は、その神によって作られたとでも？」

男は挑発するが、少女は靡かない。

「だとしたら、君はどう思うのだろうか」

少し、男は戸惑いを見せたが、やがて質問する。

「その神は、何を思っている?」

少女はふー、と息を吹く。

ため息でもなく、ただ、宣言するように。

「決まっているだろう。世界を作るものは常に孤独であるのだ。それ故に世界を作ろうとするのだよ」

そうして、男と少女は話を深めていった。

楽しい時間は続く。

しかし、終わりは唐突に訪れることになることを、男はまだ知らない。

13. BERSERK — Forces — (オリジナ  
ル・カラオケ)

その日もカウンスリングが行われた。

自分と向き合う作業は、互いに苦痛であり、労力を必要とする。でも、必要なことだと、カウンスラーは思っている。

そんな中、カウンスラーはある提案をする。

一つ、本当に楽しいと思うことを、やってみてはどうかと。

世間の眼などは気にしなくていい。

子供の頃、夢中になって遊んでいたようなものがある。

子供の頃に、あなたはどんな「くだらない」遊びをしていたのでしょうか？

「くだらない、遊びねえ」

叢雲は頬杖をついている。

言葉を飲み込み、咀嚼しようとしている。

「そうだな、久しぶりに、あの遊びを試してみるのもいいかもしれないな」

「どんな遊びでしょう」

カウンセラーが聞く。

「チートコードを使った遊びよ」

「チートコード、ですか」

チート、というと、ズルを意味する言葉であるが。コード、というと紐？ になるのか？

いや、文脈からして暗号の方か？

「あまり、ゲームとかって知らない？ のよね。じゃあ、プロアクションリプレイ、とか

言っても分からないか」

「ええ」

どうやら、ゲームに関する話題らしい。

ゲームが好きだった、という彼女の証言から、ある程度、話を掴む。

「テレビゲームとか、携帯ゲームとかって、コンピューターだから。極端な話、世界は数字でできているでしょ？」

「そうですね」

コンピューターは計算機だ。

0と1の二進法により計算を行い、結果を出力する。

ゲームはその結果でしかない、ということだろう。

「チートコードは、その数字を書き換えることができるのよ」

つまりは、ゲームの書き換えだ。なるほど、チートコード、か。

「なるほど」

カウンセラーは頷いた。

「コードを書き換えさえすれば、常にやりたい放題ができるのよ。努力も技術も、暗記も何もかもが必要でない。簡単に世界を書き換えることができるってこと」

とは、彼女は言ったものの、実際にはそれだけではないような気がする。

恐らく、数字を操作するために、パソコンや専用の機械を操作する必要があるのだろう。

そうしたスキルを持ち合わせた上で、ということだろうが。

まあ、そういう苦労があったとしても、チートには変わりなからうが。

「まあ本来は、ゲームを簡単にクリアする必要があったりとか、ゲームのデバッグに用いられる技術なのでしょうけど」

因みに、プロアクションリプレイの謳い文句もそうであった。

デバッグ、コードの書き換えは本来プログラマーの特権であるのだが。

ハッキングして、無理やり求める結果を引き出すようなものが出るというのは、それはそれで快感、なのかもしれない。



「小さいころは、そういった遊びが好きだったわね。そうやって、小さな箱庭の世界を思うがままに、操ることが楽しかったわ」

叢雲は俯きながら、話していった。

「没データを引つ張り出して楽しんだり。ゲームのスピードを変化させ、あり得ない世界を作って楽しんだりした」

ふむ、とカウンセラーは頷く。

「箱庭の世界を思い通りに、ですか。中々興味深いですね」

遊戯療法、積木やサウンドボックスに通じるものが見えてくる。

「やはり、叢雲さんにも、そういう要求があつた訳ですね。世界を思い通りにしたい、と」

そういうと、露骨に叢雲は消沈する。

「まあ、そうなるわね」

そして、しばらく沈黙する。

「屈辱だわ」

彼女の気に障ることになってしまった。

どうしようか。

「別に悪いとは思いませんけど」

誰だって、世界を思い通りにしたい、という欲はあるだろう。

世界はこうであるべきだ、だとか、そう思ってもいいと思っっている。

大抵の人は、現実を知ってそこで諦めてしまうのだが。

彼女は諦めきれないのだろうか。

「そうした姿は、いささか醜悪に見えるのかもしれない。完成された作品を、自らの手で汚していく快感は。少なくとも自分は理解されなかつた」

小さな世界をバラバラにし、そして再構築する。

カウンセラーにはそうした快楽を理解できる。

「世界は自分だけのためには無いと。中学のときにも言われたよ」

音楽だつてそうなのだ。

憧れのミュージシャンの音楽を、自らの手で演奏する。

そうして、彼らにまた一步近づいたのだと、幻想を抱くのだ。

だが、彼女はこう思っているのかもしれない。

「そうして現実に写る自分の姿が惨めである、と?」

「そう」

憧れのミュージシャンの音楽を、自らの手で演奏したつて、彼らになることはできない。  
い。

それは、単なる模倣でしかないのだと、人は野次るかもしれない。

そうであろう。

だが、はたしてそれだけだろうか？

カウンセラーは疑問を抱く。

「ゲームの世界でもそうでしょう。普通にゲームをして、努力しまくったプレイヤーが最強の外見を保持している。技術を極めたプレイヤーが名誉を手にする。暗記しまくったプレイヤーが世界の全てを手にする」

彼女の言っていることは、正しい。

だが、その思想は区別と差別に満ちている。

彼女は尊く見えるものの価値しか認めていない。

彼女は強きものの価値にしか価値を見いだせないでいる。

「ドーピングと一緒よ。不正で手に入れた勝利は、健全な勝利にどうしても劣ってしま  
う」

ドーピングか、なるほど。

適切な表現だ。

確かに、健全とはほど遠いものだ。

したくなる気持ちも、分かるのだが。

それだけ勝利の蜜は甘く、やみつきになる味なのだから。

「だからまあ、チートをする人たちは、仮に現実でそういう力を得たとしても、決してその欲求が満たされることはない」

虚ろなる栄光に憧れ、ズルをして手にする。

そうした人たちが待ち受ける運命とは。

大抵は破滅であるのだろう。

しかし、どうも、話はそういう方向ではないようだ。

「例えば、そうね。ある重病に罹っている人がいるとしましょう。その人が、薬を手にしたとして、ある程度症状が緩和されるなら、その人は喜ぶのかしら」

カウンセラーは少し考えた。

そういう人たちは見たことがある。

例えば、小児の末期がん患者であったり。

「そうではないのでしょうか」

彼らは生への渴望がある。

そこに自身の生があるのなら、小さくとも喜びを感じていたのが彼らだった。

「そう思わない人もいるのだよ。もっと効果を。　『普通になりたい』と思うのだから」

普通になりたい。

その渴望は彼女のものだったはず。

そう思わない人、とは彼女であるのだろう。

「そうだな。私は、とある歩行具をつけていることを、告白しようか」

カウンセラーは手を止める。

「歩行具、ですか」

「私は現実でも、チートをしているのよ」

現実でのチート？

何か、彼女はドーピングのようなことをしているのだろうか。

「自分がこの世界を作り直すとき、不安に思った。新たな世界で、自分は活躍できないの

かもしれない」

この世界の異常は、彼女曰く、彼女が作り出したという。

それは、なるほど、そうか、とカウンセラーは受け止めている。

「とても、怖かった。現実の私を、欲しいと思ってくれる人がいて欲しいと思った

。だからチートに手を染めた」

ドーピングを白状する人のような叢雲の姿を、カウンセラーは黙って受け止める。

「私のチートは、潜水艦の位置が簡単にわかるリーダー。これで、対潜でのMVPは常に

私って訳」

叢雲は薄く、笑った。

「はつきり言つて、惨めな気分だ。なんで、私はこんなズルをしているのだろうってね」  
喜べばよかろうに。

ズルをしていても、それで自身が救われるのであれば、良かろうに。

「でも。もつと力を、発揮したくてたまらない。私は、私はまだ、こんなものじゃない。  
私の持っている反則的な暴力の力を、ぶちまけたくて仕方がない」

叢雲は顔を手で覆う。

「それは、それでも。叢雲さんなのではないでしょうか。その力で救われる人もいるの  
でしよう?」

艦娘は、国防の要だ。そこは誇るべきではなからうか。

「私が一連の騒動の原因である以上、どうあがいても悪質なマッチポンプになるのだけ  
ど」

そうだった。

そうでしたね。

「こんなズルしなくなつて、どうせ死にはしないのにね」

叢雲はそう吐き捨てる。

「これについては、うん。あー。ファイトクラブって映画が興味深いことを言っている

わね」

フアイトクラブ。

カウンセラーにとって、聞いたことはあるが、見たことのない映画だ。

「フアイトクラブ、ですか。聞いたことはありますが。どんな映画ですか。暴力の映画と聞いてますが」

叢雲はそれを聞いて、眉間にしわを寄せる。

「観たことはないの？ 観てみるといいわ。タイラーが格好良いわよ」

フアイト・クラブのあらすじはこうである。

主人公の「僕」は優秀だが冴えないサラリーマン。

高級家具に囲まれながら、どこか釈然としない生を送り、不眠症となっていた。

医者を頼ると、重病の患者の集いを紹介される。

そこで、死に直面している患者たちと触れ合うことで、不眠症は解決したと思われる。

だが、「僕」と同様の女、「マラー・シンガー」が集いに参加していることで、再び

不眠症を煩わせていくことになる。

そんな中、家が火事となり、全ての高級家具を失うこととなった。

途方に暮れる「僕」は、飛行機で知り合ったイカした石鹼の行商人、「タイラー・ダー

デン」を頼ることとなる。

彼と酒を飲んで殴り合った後、彼と設立した殴り合いの場「ブアイト・クラブ」が「僕」の生において、重大な意味を持つことになっていく。

「筋骨隆々で、ワイルドなイケメンで、頼りがいのあるタフガイ。そんな人物が、あー。タイラー・ダーデンなのよ」

カウンセラーはそれを聞いて、ある人物を思い浮かべる。

彼女が愛読するコミック、WATCHMENのヒーロー、コメディアンだ。

彼も、筋骨隆々のタフガイだ。

「あなたも。そういう気持ちがあるのでしょうか」

「そういう？」

叢雲は聞き返す。

「その。タイラーのような男に、憧れとか抱きませんかね」

叢雲は、ああ、と納得した反応を返す。

「男なら誰しも、一度はあのような男に憧れるものと思ってる。自分がアメリカ人なら、あのような男を理想の姿に描いていたのかもしれない」

そこで叢雲は、ふん、と一笑する。

「ま、タイラー・ダーデンの姿は、男の下らない理想の姿でしょう。否定はしないけど。

まあ、そう、思いたいんだけど」



「マッチョイズム、を否定しようとしているのだろうか。」

彼女の姿は、絵に描いたような美少女だ。

彼女の思惑がどうであれ、マッチョは彼女の好みではないのだろう。

「ただ、タイラーの言うことは、自分たちのような人間にとって非常に興味深いと思うわ。現代の人間は皆、物質主義の奴隷なのだ」と

じつと、叢雲はカウンセラーの眼を見つめた。

「普通の人たちは、お金があることだとか、結婚していることだとか、あるいはオタク趣味に囲まれることで、あるいは、才能に恵まれることで幸せを感じているんだ」

それが、普通なのだ。

それを疑問に思わずにいるところが、特に普通なのだ。

「そして、それに疑問を持つているアウトサイダーが、自分たちなのだ」

普通は疑問を持たない。

疑問を持つならば、その人は異端者。

それが、この社会の構造なのだ。

「仮に私が、精神病院だかに行つたとしよう。そうしたら、こう言われるはずだ、  
“薬飲んで運動しろ”ってね」

馬鹿馬鹿しいと、叢雲はつぶやいた。

「運動して得られる肉体は、そんなに素晴らしいのかしら？ それとも筋肉はすべてを解決するとも言おうのかしら？」

薬を飲んで精神を落ち着かせて、健全な肉体を作り上げること、幸福感を維持する。普通の人間ならそれを疑問に思わず、それを実行して救われるのであろう。

それを叢雲はそうして救われることを否定していた。

「あるいは。自分たちが、神様からチートを貰って、それで無双して、それで幸せに暮らしましたとなるとでも？」

才能があつて、それで活躍して、幸せを感じることに。

それを叢雲は否定していた。

「本当にそんなのつて必要なの？ この感覚つて分かんないかな」

カウンセラーは沈黙する。

そうした幸せが、彼女にあつてもよかつたのだと、カウンセラーは思っていたのだつた。

「あの映画が言うように。自分たちは自分たちの手法をもつて、よく生きることを求めなければいけないのよ」

必死に、何かを、叢雲は伝えようとする。

「社会は決して、自分たちを救わない。連中がすることは、自分たちにマイナーの烙印を

押し、迫害することだけだ。そして知れという、あなたは幸福である、と」

カウンセラーに、言葉が刺さる。

「そんな中で、生きなきや、つて求められるのさ」

叢雲の声が、震えていた。

「チートなんか、持たなくなつて、十分に人は生きられるはずなのだけどね。必要なのは、よく生きることには必死になること、なのかもしれないな」

そして、意気消沈して、叢雲は項垂れる。

「私は、恐らく、昔から、必死さが足りていないのだと」

机に伏しながら、言葉を紡ぐ。

「私たちは真剣に、戦わなければならない。例え、艦娘でなかつても」

そうした中で、突然彼女は、戦う意思を示した。

「何故、私たちは、彼女らと戦っている？ それをもつと、真剣に考えないといけないのでしょうかね」

なるほど、確かに興味深い。

アウトサイダーの幸福。

カウンセラーはそれについて、もつと考えてみようと感じていた。

# 14. BERSERK — Forces — (TV version)

呉鎮守府の一角、建造ドック。数多の艦娘が生まれる場所。

建造を担当する艦である夕張と長月は、夕食を取っていた。

食事はポークビーンズとポテトサラダという満足のいくものであった。

最近、建造もなく、多少は平穏であった。

とはいえ艦これユーザーが「ドロップ艦」と表現するであろう現象が起きているので、全く仕事がないという訳にはいかなかった。

それらの担当も、彼女たちの仕事であるのだ。

「彼女の調子はどうだ？」

「何も。特に変な所はないわね。艦装以外は、って所だけど  
「そうか」

「この一番の問題は、呉鎮守府のカウンセラーの行方不明と、同時に発見された「神隠し」によって作られた特殊な艦装の艦。

同時期に他に行方不明になった人間がいないことから、呉のカウンセラーは妖精さん

に浚われ、艦娘にされてしまった、と夕張たちは結論づけた。

これが鎮守府的には大問題であった。

おかげで兼正提督も、尾崎提督も大忙しだ。

夕張たちも今は忙しくはないが、いずれ作業に悩まされることになるだろう。

現在彼、いや、彼女は妖精さんの工房に安置されている。

「邪魔するわよ」

そんな中で、叢雲が現れた。

叢雲の長月たちとの関係は、たまに顔を見る程度の関係である。

かつて、叢雲は横須賀で建造を担当していたこともあり、関係はそれなり、といった

ところだろうか。

「叢雲か。どうした？」

「ん。ここの様子を見に来ただけよ」

「隠さなくていいわよ。彼女のことを心配なんですよ？」

叢雲がカウンセラーと面識があることは、鎮守府の事情に特に詳しい二人の知るところである。

そして、どんなことで面識があるのかも当然のように知っている。

夕張の指摘に叢雲は渋い顔を作り、そっぽを向いた。

「否定はしないわ」

少し間をおいて、二人に向き合う。

「で、彼は何になつたの？」

率直に、質問をした。

彼の、彼女の艦名は、何であるかと。

「多分、速吸」

「速吸？」

夕張は、洋上補給とカタパルトといった、彼女の機装から判断した艦名を出す。

しかし、叢雲の聞きなれない、知らない艦である。

「カタパルト付の高速タンカーよ」

「叢雲が沈没した後の艦だな。知らなくても無理はない」

「ふーん」

叢雲が沈没したのが1942年、速吸が起工したのが1943年である。

そういった意味で、叢雲の知らない艦であるのだ。

「見てみる？」

夕張の提案に、叢雲はこくりと頷いた。

そうして、二人は妖精さんの工房へと足を運んだ。

長月は妖精さんの工房の中に入れてないので、入り口で待機している。立入れるこの二人が特別なのだ。

そこには、白ジャージ姿で辺りを見渡す、黒髪の少女の姿があった。

「あら、お目覚めね」

「えーと。おはようございます」

少女は軽く会釈をした。

それを見て、夕張も軽く頷く。

「調子はどう？」

「何と言いますか。まるで生まれ変わったようです。はい」

「まあ、確かに。その表現は正しいのだがな」

長月が独り言ちた。

「で、自分が何なのか、分かる？」

夕張が確認を取る。

自分が何の艦娘なのか、あるいは艦娘とは何なのか、自分でも分からない艦娘はたまにいる。

そうした意味もあり、この質問なのだ。

「航空機搭載給油艦、速吸です。ああ、艦娘ですよ。はい」

「当たり前」

「分かっているのならば話は早いな」

どうやら彼女は艦娘としての自覚があるらしい。

物分かりの良い艦はたまにいるが、彼女もそのようだ。

「どこまで、覚えている？」

そんな中、叢雲が問う。

「どこまでつて、少なくとも、貴女のことは。叢雲さん」

「本当に珍しいわね」

夕張は驚いて口を開ける。

叢雲はさもありません、といった態度を取っている。

「ともかく、提督に連絡だな」

問題解決のため、事務仕事やらなんやらが彼女たちを待っている。

長月が夕張をせかした。

「ちよつと。先生、いや、この娘と話をしたいのだけど、いい？」

夕張はそれを一瞥すると、気にせず工房の外へ足を向け、長月もそれに従おうとして  
いる。

「構わんよ。私たちは速吸の問題や所属について、提督と話をする。その間、面倒を見て



くれ」

そうして、残された二人の間に、沈黙が流れる。

「まずは。そうね。あなたが艦娘になるなんて、本気でどうかしているわ」

「私も考えた上で、ですよ」

「貴方はカウンセラーでしょ？ 私は見捨てて、他の艦を救いなさい。その方が賢いわよ」

「私は、目の前の艦を救ってこそ、カウンセラーだと思います」

それを叢雲は鼻で笑った。

「貴女にも、所属する家族や組織があるでしょうに」

「そうですね。そう言われると言い返せませんね。はい」

速吸は苦笑した。確かにこれで家族に会わず顔はないな。

とはいえ、そんな倉橋佳樹にとっては元々だった。

カウンセラーになると決めたあの時から、元々の生活は捨てると決めていたのだから。

一番の問題は、自分はこれから嘗ての生活を送ることができないだろう、ということである。

カウンセラーを続けることも、正直できるかどうか分からない。

「でもやはり、艦娘のことは、艦娘にならないと分からないと思ひまして」

ただそれでも、艦娘になることに、良き自身の道があるかもしれないと思ったのだ。

叢雲との出会いに、大事にしたいと思っていた。

その姿を見て、叢雲はため息をついた。

自分ほとんど馬鹿者に出会ってしまったのかもしれない。

「にしても、カタパルト搭載のタンカーって。艦娘としてアリなの？」

「そうは言われても。速吸は困ります。というか叢雲さんも、知らない艦娘がいるのですね」

「それは、いるわよ。私だって艦これの全てを知っている訳ではないわ。私が知るの、精々、艦これ改までよ」

つまりは、アイオワや鹿島までが叢雲の知るところであつたりする。

あと、駆逐艦辺りはちゃんと覚えているか怪しい。

まあ、それはともかく。

「で、艦娘になつた気分はどう？」

それを聞いて、速吸は少し考える。

「まだ、良く分かりません」

艦娘の速吸としては、まだ戦ったこともないひよつこだ。

自身の特技である洋上補給だって、したことはない。

「ですが、分かったことがありますね」

叢雲に微笑みかける。

「こんな気分なのです。艦の重みというものは」

「ふん。戦時生まれのタンカーが何を言っているのだから」

速吸、排水量20000t。叢雲、1980tである。

とはいえ、彼女たちの言う所の艦の重みとは、別の所であるのだが。

つまりは、積み重ねてきたものの重みだ。

「艦娘というのは、思ったよりも、はるかに重いものだと思うのですよ。叢雲さんもそう

思いませんか」

叢雲はそれを聞いて黙る。

「少なくとも、自分はそう思っていたのだと思う」

叢雲は速吸を見つめる。

ニコニコ元気で、明るい艦娘だと思う。

彼女がそして、彼が何か悩みを抱えているとはとても思えない。

自分と同じ側の人間とは思えないのだ。

それなのになぜ、彼女は人を、そして自分を見つめるのだろう。

彼は自分を見つめていたのだろう。

「でも、自分を変える、というのは気分が良いものです。古い自分から抜け出し、新しい自分へと。それが、理想に近いものであれば尚更です」

そうして自分を指す速吸。

叢雲は困惑する。

彼も変わる必要が、本当にあつたのだろうか？

彼はイケメンという訳ではなかったが、気のいい兄ちゃんみたいであつたのに。

モテないことを自称するモテそうな奴、というのが叢雲の持った印象であつたのに。

彼はどうして艦娘になることを受け入れたのか。

こればかりはどうしても分からないのだ。

「叢雲さんは、新しい自分へと変えた後に、幸せが訪れるのだと思つていたのですよね」

それは、凶星だった。

「多分、そう」

恥ずかしくなり、目を逸らす。

「ですが、幸せというものは、そういうものではないと思うのですよ。何かをした後に幸せが訪れるのではなく、何かをしている時が幸せなのではないでしょうか」

速吸が思うに、彼女は行動の後に幸せを期待しているのは明らかだった。

銀河鉄道の夜の話をしたときもそうだ。

銀河鉄道の一時は美しいのに、彼女は現実に戻った時のことを気にしている。

それは違うのだ。

幻想の一時もまた、生きる世界の一つであり、今、ここであるのだ。

「例えば、運動をしている時に。ランナーズハイでもいいですが、幸せを感じませんか？」

叢雲は嫌な顔をした。

「その感覚は分からないわ。私も鬱病対策に運動はしているけど、大抵は辛いだけだから」

「では、ゲームではどうでしょうか」

視線を下げ、考える。

「それなら、分かる気がする」

ゲームをするのは楽しい。

現実から離れ、異世界へと旅立つ一時。

そこには素敵な人たちがいて、自分の心を癒してくれるのであった

それでも、それでも。そうであるのだが。

「でも、ゲームをした後に幸せがあるのではなく、ゲームをするのが幸せだと？」  
視線を戻し、訴えかける。

「こんなのを求めてはいないのだ。」

「分からないわ。自分が求めているのは、何かの後に現れる幸福を。出会いが、その後の人生を左右してくれる程のものなのよ」

現実こそが自分の生きる世界であり、そこに私は幸福を求めているのだ。

「こればかりは、どうしても譲れない主張なのだ。」

「では、叢雲さんの幸せは、どんな形をしているのでしょうか」

「私の、幸せ」

速吸は、首を傾げて聞く。

「どうある姿が、幸せであると言えるのでしょうか。速吸は叢雲さんの幸せに興味があります」

叢雲は、幸せ、幸せ、と呟き、自分に言い聞かせる。

「私は、どんな姿が、幸せであるかは分からない」

俯き、語り続ける。

「言ったと思うけど。私が好き勝手したって、それが認められるとは思わないから。そ

ういう人って、極端に少ないでしょう？ 好きなことで生きていくなんて、極一握りの成功者の言葉でしょう？」

「そうですね。はい」

好きなことで生きていく。なんと甘美な言葉だ。

大人たちはそれを子供たちに大いに語っているが、現実は厳しい。

多くの子供たちが、現実を知りながら、大人になつていくものだ。

「確かに、殆どの人は成功者ではありません。ほとんどの人は、どこかで妥協して、なああで生きているのです」

成功者はいらる。膨大な生存競争を潜り抜け、そして生まれる。

そうした姿は美しく映えるものだ。

しかし、その過程で多くの敗北者の機会を踏みにじっている。

そうした者たちは往々にして語られない。

いや、皆そうであるが故、語ることでできないのだ。

「妥協できるのは、それはそれで幸せだろうけど」

しかし、それだけが人生ではない。

例え負け組の人生を送ろうと、幸せはそこらへんに転がっているものだ。

少なくとも、そのはずだったのだ。

「今の世界は、優しいです。かつてのように飢えて苦しむこともありません。嘗てのように、生きるためだけに、努力する必要があるというのは辛いことです」

速吸として過ごしたごく短い期間。速吸は戦争という地獄を知った。

そこはただ、生き残るための生存競争であつた。

戦いであつさりと死んでいく兵士たち。

戦わなくとも病気やら事故やらで自然と死んでいく兵士たち。

そして、尽きることの無い敵と戦う、勝利の終わりが見えない戦い。

その中で速吸は生き、そして沈んだ。

期間は短くとも大きいその思いは、この身体の中に息づいている。

それを考えれば、同じ戦いの世でも、今の世は天国であろう。

少なくとも、簡単に死ぬことは、艦娘には存在しない。

「でも、それでも。優しい世界にいても、苦しみ続ける人がいることを、私は知っているのです」

「それが自分であるところ？」

それを聞いて、叢雲は速吸を睨む。

それでは、自分が弱者のようではないか。

「生きること自体が本来、戦いであつたのです。ですが、彼らは、そのことを忘れていな



いだけなのです」

速吸はこの世の中において苦しむ彼らのことを、この時代における戦士だとおもうのだ。

どうしようもない現実と戦う、戦士であると。

それは弱者であれど、良く生きることを求める求道者たちなのだ。

その主張を聞いて、叢雲は口をつぐんだ。

工房の時計の針が流れる。

そして、叢雲が口を開いた。

これを言わなければ、と思いだしたのだ。

「いつ、どこで思ったかは、忘れてしまったけど。自分の幸せは、完璧な自分を演じることでできれば、訪れると思っていた」

ぼそりぼそり、とこぼした。

「完璧な自分を？ 人から見て、でしょうか」

「いや。自分から見た、完璧な自分」

馬鹿らしいとは思うけど、叢雲はそう付け加えた。

「自分の紡いだ言葉が、人を動かせるのなら、素晴らしいだろう。自分の作った作品が、褒められ、称えられる。自分の歌った音楽が、人の心を共鳴させ震わせる。それで

あれば、素晴らしいのだろうか」

それは夢だったのだ。

この世界でちつぽけな自分が、世界を描き、変えるのだと。

叢雲はそう思っている。

「そして、これらは本当に難しい。極少数の人に対してはできるけど、大多数の人に向けては無理だ。皆の人気者であることが、自分の憧れではあつたけど。今は、どうであれ苦しみがあると知って、そうは思えないのだけど。その志向だけは変わらない」

今の自分が、どうであるのかは分からない。

自分は社会の中で、十二分に狂ってしまった。

今の自分が、叢雲であるのか、正直自信がない。

こんな自分を見て、叢雲だと信じれる人が、かつての艦これユーザーの中で、どれだけいるのだろうか。

でも、こんな自分でも、叢雲であるところはあるのだと思っている。

「自分を、世界を律するのだと」

自身が誇りをもって、自身と世界を制しようとしているのだと。

それだけは叢雲であるのだと、自分は信じているのであった。

「そうして、生きていくのよ。これからもね」

自分でも嫌な生き方だと思う。

だが、自分だけでは、これが限界なのだ。

そんな生き方をして、今後どうなるのか。

わからないが、どうせろくなものではあるまい。

「これからも。出来ればですが。速吸も、叢雲さんと一緒に歩んでもいいでしょうか」

そんな叢雲に、速吸は微笑みかけた。

彼女としては、そんな叢雲がどうなるのか、とても興味があった。

「いいけど。私なんて、案外くだらないわよ」

互いに理解はできていない。

それでもここに、奇妙な信頼関係があった。

「ですが、そこに価値があるわけではありませんか？」

彼女たちの生は続く。

何時まで続くかは誰も知らない。

それでも、彼女たちは生きようとするのであった。

そこに理由はない。だが、生きることとは、そういうものであるのだから。